

## アマチュアコード

- アマチュアは 良き社会人であること
- アマチュアは 健全であること
- アマチュアは 親切であること
- アマチュアは 進歩的であること
- アマチュアは 国際的であること



日本アマチュア無線連盟  
新潟県支部糸魚川クラブ  
JA0YKA 08-1-17  
第398号 2021年末号  
編集&発行責任者：JE0KBP  
<http://www.jarl.com/ja0yka/>  
令和3年11月17日発行

☆☆☆☆☆☆☆☆ 本号のヘッドライン ☆☆☆☆☆☆☆☆

- ◎アマチュア無線物語 ～JA0GUXの無線回顧録～
- ◎JA0YKAクラブ内コンテスト規約について
- ◎JARL新潟県支部大会誌面大会の要項について
- ◎11月～12月の行事案内 および オンエアミーティング担当者紹介

今号のトップ記事には、元糸魚川クラブ会長で大先輩の小間 OM から「アマチュア無線物語」という原稿を寄せていただきました。

ラジオ少年だった頃から始まり BCL、ハム開局、2mでのDX、タワー建設やアンテナのメンテナンス、2アマ取得、自作機器など小間さんの長い経験や実践に基づいた素晴らしい原稿です。48ページに渡る長編ですがどこから読み始めても興味深い内容でした。秋の夜長、小間 OM のチャレンジ精神に浸ってみてはいかがでしょうか。

JARL 新潟県支部より支部大会の要項が送付されてきましたのでクラブ員の皆様にお届けいたします。本来なら各地・各クラブが持ち回りで市民会館や公民館などを会場に賑やかに開催される大会ですが、新型コロナウイルス感染防止の観点から中止になりました。

「夜明けは近いぞ！もうひと頑張り！誌面大会」と言うスローガンです。事業報告、事業計画、予算決算、役員一覧、委員会報告、コンテスト結果、登録クラブのPRなどが掲載されています。

ご一読ください。



## 11月～1月の行事、オンエアミーティングの予定と担当者

この期間の糸魚川クラブの行事は11月27日の忘年会、新年1月2日からのクラブ内コンテストです。奮ってご参加ください。12月の行事はありません。良いお年をおむかえください。

### 忘年会

日時：11月27日(土) 18:00

会場：あじさい (糸魚川小学校の向かい側)

会費：¥5,000

幹事：JHOFZG 山田さん

### クラブ内コンテスト

- 1 開催日時：2022年1月2日9時(JST)～1月7日21時(6日間)
- 2 交信相手：アマチュア無線局
- 3 周波数：自局に許可された周波数、モード、電力による。
- 4 得点： HF帯・・・1交信1点  
VHF, UHF帯・1交信5点  
クラブ員との交信・1交信10点
- 5 マルチプレイヤー：国内1～0のエリアナンバー  
&DXエンティティ及び 運用日数
- 6 クラブ員名簿(以下に示す方は10点です)：  
JAOCAB、JAOCYK、JAOEKS、JAOGUX、JAOPHB、JAOPYA、  
JEOJJR、JEOKBP、JFOOKZ、JFOOIL、JGORUR、JHOBQV、  
JHOECZ、JHOFZG、JHOGLG、JHOGVD、JHOOIS、JHOURU、  
JHOVYM、JIODLO、JIOFJE、JI0IOI、JI0LQJ、JJ1IJD、  
JJ0HWP、JJ0QJB、JROJMY、JROLNI、JROLOZ、JROXLY
- 7 ログ&サマリーの提出先：JROXLY(小竹)またはJEOJJR(細貝)
- 8 書類の提出締切：1月31日。発表と表彰は3月の年度末総会で行います。

### オンエアミーティング

毎週土曜日 21時より 145.32MHz

11月のキー局は JAOCAB 藤田さん 11/6 11/13 11/20 11/26(金)

12月のキー局は JROLOZ 岡田さん 12/4 12/11 12/18 12/25



糸魚川クラブのインターネット掲示板はこちらのQRコードを携帯やスマホで読み取ってご覧ください。

※1月1日オンエアミーティングの予定でしたが、中止します。

昭和44年(1969年)8月11日、私は糸魚川市の根小屋の四畳半の下宿部屋にアマチュア無線局「JAØGUX (ジェイ・エイ・ゼット・ジー・ユー・エックス)」を開局した。

“無線局”と聞けば、誰もが最先端の技術からなる高性能な無線機器や、空高くそびえるアンテナなどを備えた、すごく近代的な施設を連想するであろう。だが、このとき私が開局した無線局は、出力1wの携帯可能な小型の無線機が1台と、アンテナはその無線機に内蔵された伸縮式のロッドアンテナが1本という、極めて小さな無線局だった。当時の感覚としても、真空管仕様の無線機が主流の時代に、真空管を使わない小型の無線機だけの無線局は珍しかったと思う。確かに大々的に運用している無線局とは、比べ物にならないほどの、小さな小さな“無線局”だった。

だが、実際に開局に至るまでの道のりには、思ったよりも多くの障壁があった。むしろそれら乗り越えてきたという達成感が私の心の底にあった。私にとってこの無線局の開局という出来事は大きな感激だった。

その感激の日から40年以上が過ぎた。この間に「無線局JAØGUX」はアマチュア局とはいえ、趣味で運用する無線局としては贅沢なほどに充実していった。(と、自分では思っている)

無線に興味や関心のない人から見れば、このJAØGUXという無線局のやってきたことについては、とりわけその「無線バカ」ぶりには、眉をひそめたくなくなった人も多かったであろう。しかし、私自身は真面目に取り組んできた無線活動であったと自負している。

これまで歩んできたアマチュア無線局JAØGUXの半生を、回顧録としてまとめてみたいと思う。ともかく、思いつくままに書き連ねてみることにした。

## ○初めてのラジオづくり(小学校時代のほろ苦い思い出)

私は、アマチュア無線局のことを「ハム」と呼ぶことは、長兄から聞いて小学生の頃から知っていた。6歳年上の兄は早くから電気に興味を持ち、家の電気製品の管理や簡単な修理の手伝いなどには積極的に手を出すなどしていた。特に電気に関する知識は明るく、電気製品の使いすぎなどによるヒューズの溶断の際の復旧作業などでは、家族の先頭を切って取り組んでいる姿を見たりしたものだった。(当時は“ブレーカー”などという“保安装置”はまだ普及しておらず、“安全器”というヒューズボックスが配電盤に取り付けてあった)

兄は早くにこの世を去っており、ハムを志していたかどうかは今となっては分からないが、兄が半田ごてやドライバー、ニッパー、ラジオペンチなどの工具を駆使している姿は早くから目にし、私自身もそういった工具をおもちゃにして遊ぶなどの機会があった。

しかし、どうすればハムになれるかまでは私は知らなかった。おぼろげなイメージとして、ハムになるには免許がいるらしいということのほか、真空管が何本も使われた、すごく高価で大きな無線機と、空高くそびえたアンテナが必要という程度の知識しか持っていなかった。男親ひとりの収入で、しかも裸電球の下で7人の家族が身を寄せ合って暮らしていた当時の貧しい生活の中では、アマチュア無線などというものはどこか遠くの世界の、裕福な輩(やから)が楽しむ酔狂であって、自分にとっては絵に描いた餅のような、はるかに高い雲の上の存在のように思っていた。おそらく兄も同じような気持ちでいたに違いない。

だが、私の小学校時代の遊び仲間の中には、ラジオ屋の息子がいたり、兄のように電気に強い興

味を持っている者がいたりした。このような人間関係の中で私は、早くから見よう見まねながらも電気工作に接する機会があった。もちろん兄が使っていた工具や電気部品（パーツ）なども、私の手の届くところにあった。こういったことなどが下地（環境）となって、私を電気工作の世界に足を踏み込ませてくれたのかもしれない。

小学校4年生か5年生の頃かと思う。遊び仲間だったラジオ屋の息子が、鉱石検波器（方鉛鉱の結晶を絶縁体の筒にいれ、バネで接触抵抗を持たせて半導体化したもの）を使った「鉱石ラジオ」というものを作り、仲間に得意そうに見せびらかしていた事があった。そのラジオを見た私は、「これなら部品さえあれば自分にもできる」と思ったものだった。こうして仲間から刺激を受けた私は、初めてラジオというものを作ることにチャレンジすることになったのである。

この「鉱石ラジオ」は、当時（昭和30年頃）一般家庭に普及していた「並3式ラジオ」（交流式で真空管（ST管）が3本で動作するラジオ）の部品の、同調コイルとバリコンを使って放送電波を受信し、鉱石検波器で検波して音声信号を取り出し、それをマグネチックのイヤホンで聞くという、初歩的で非常に簡単な回路構成のラジオだった。放送局から近い電波の強い地域では、この程度と同調回路と検波回路だけでもラジオ放送がイヤホンで聴けたのである。ちなみにこの頃は、鉱石検波器1個が50円ほどで売られていたように思う。ラーメン一杯の値段が40～45円くらいだった時代だから、現在の相場に直すと……。

これらのパーツ（部品）を葉書くらいの大きさの板（小学校で図工の時間に使った版画の板か、板蒲鉾の板のようなものだったように覚えている）の上に木ねじで取り付け、あり合わせのビニール線でパーツを半田付けして結線するという簡単な作業だったが、私にとってはレベル的にちょうど良い工作活動だった。今から思うには、このときの工作が無線の世界に足を踏み込むスタートでもあったのかもしれない。

ついでながらこの時の工作の結末を紹介しておこう。夕方、帰宅してから作り始めたこのラジオ工作は深夜にまで及び、完成したのは日付が変わった頃だった。はやる気持ちを抑えてアンテナ（といってもビニール線を鴨居に引っ掛けた程度のもの）をつなぎ、レシーバーを耳に当ててみた。

しかし、同調バリコン（ダイヤル）をいくら回してみても、聞こえてくるのは部屋の蛍光灯の「ジー」というノイズ音だけだった。ラジオ制作の初挑戦は失敗だと思った。がっかりした気持ちで、あとかたづけもしないで寝たことを覚えている。

翌朝、自分の机の上には広げっぱなしの失敗作があった。それでも何か聞こえないか、という気持ちで、未練がましくイヤホンを耳に当てて飛び上がった。聞こえた！ イヤホンから音楽が聞こえていたのだ。心臓が口から飛び出しそうな気がした。

実は昨夜の工作は成功していたのだった。しかしあの時は確かに聞こえなかったのである。この謎の答えは簡単だった。当時はNHK、民放ともに深夜放送は行っておらず、午前0時を過ぎる頃には各放送局は放送を終了し、停波していたのである。東京や大阪などの首都圏では深夜放送は行われていたかもしれないが、この程度の鉱石ラジオでは、遠い都から届くその微弱な電波は受信できるものではなかったのである。その日私は意気揚々と登校し、仲間に自分の工作が成功したことを吹聴してまわった覚えがある。

こうしたことを契機に、私のラジオへの興味関心が一段と強くなり、半田ごてでやけどをしたり、畳に焦げ跡を作ったりしながら、工作活動にのめりこんでいったようだった。

方鉛鉱の鉱石検波器は、のちに超小型で性能の良いゲルマニウムダイオードという半導体に変わり、マグネチックレシーバーは、もっと感度の良いクリスタルイヤホンへと変わるなど、日本の産業が高度成長の波に乗って発展するにしたがい、電子部品やパーツ自体も急速に性能が向上していった。さらに同調回路に $\mu$ 同調方式（小型のコイルの中にフェライト片などを挿入し、コイルのQを変化させて同調をとる方式）が開発されたりするなど、パーツの小型軽量化が進むと、それらを使ってマッチ箱くらいの大きさの携帯ラジオが作れるようになった。

この方式のラジオは電池が要らず、外出時には服のポケットなどに入り、伸縮アンテナ（ロッドアンテナ）やビニール線のアンテナをつけるだけで、放送局から近い地域では屋外で中波帯のラジオ放送を聴くことができたのである。

このような工作を通して、半田付けや工具の取り扱い技術などの腕を上げていったのであろうか、図工の時間やクラブの電気工作の技能では、同級生より一歩進んでいたように思う。

### ○遠距離受信にはまる（中・高校時代 = ラジオ少年と呼ばれた？）

中学校時代になると、地元の放送局を受信するだけでは物足りなくなり、より遠くの県外の放送局などを受信することに熱中するようになった。そして本格的なラジオ作りにのめりこむようになったのである。

ラジオ工作に使う真空管やトランスなどの部品は、当時はまだ値段が高く、なかなか新品を買うことが出来なかった。したがって、廃棄されたラジオなどから部品を外し、それを活用することが多かった。そして廃材置き場などから、コイルやバリコンなどのラジオ部品を集めては、並3（普及型3球受信機）や並4（同4球受信機）と呼ばれる真空管式のラジオを作ったり、さらに遠くの放送局を受信するために、ラジオの感度を高める工夫や改造を繰り返したりしたものだった。

そうしているうちに、さらに高度な電気知識や半田付けなどの技術が身に付き、ラジオの修理や工作にかけてはかなりの“腕”を持つようになった。そして、私がそういう“ラジオ少年”であることが遊び仲間にも広がったのか、友人などからラジオの修理などを頼まれたりすることもあった。しかし、住んでいたところが地方だったせいもあって、必要な部品がなかなか手に入らず、思い通りに修理できないこともあった。学校帰りなどには部品調達のために、廃材置き場（というよりゴミ捨て場といった方が正しい？）などへ足繁く通ったものだった。

そういうことを繰り返しているうちに、真空管5本で構成される非常に感度の良い「5球スーパーヘテロダイク式受信機」（当時としては最高級のラジオ受信機）の修理や、改造なども手がけられるようになっていった。

この頃かと思う。簡単なありあわせの部品で電波が発射できることを知り「ミニ送信機」を作ったことがあった。この送信機は、スーパー式受信機の局発の信号に音声を乗せ、それを電波として発射させるといった非常に簡単な構成で、いとも簡単に中波帯（ラジオの放送波帯）に電波が発射できたのである。当時はマイクロホンなどはまだ非常に高価で、当然ながら私は持っていなかった。したがって、ありあわせのクリスタルイヤホンをマイクに代用しての工夫だった。

この送信機の電波は、上手に調整しても到達距離がせいぜい100mくらいしか届かない、非常に微弱な電波で、がんばって送信しても少し離れた隣の家のラジオに、雑音として入るかどうかという程度のものだったのだ。だが、幼心には無免許での（法を犯しての）電波発射ということで、後ろめたさを感じながら（内心どきどきしながら）実験（というよりいたずら）をした覚えがある。

5 球スーパー受信機の原理が理解でき、組み立てや調整ができる程度の知識と技術を備えていれば、アマチュア無線技士（初級）の国家試験は合格するであろうといわれていた。しかし、この頃の私は無線への熱はまだ低く、むしろ遠くの放送局を受信することの方に熱中していたようだった。

当時はラジオの普及を進める狙いもあったのか、国内の中波帯の民放の各放送局は、リスナーからの受信報告を受付け、その証しとしてきれいな絵はがきのような受信証（ベリカード＝受信報告証明書）を発行していた。そのベリカードを集めることもまた楽しみの一つだった。

現在手元にある 50 枚ほどの国内放送局の受信証（ベリカード）を見ると、自宅から 1,000 km を超えるような遠くの局のものがあつたり、送信電力が数 100w などとかなり小さい放送局のものがあつたりしている。ということは、この頃私が自作し愛用していた 5 球スーパーの受信機は、当時としてはかなり性能がよかつたのではないか、と思つたりしている。受信証の一部を紹介しよう。

写真にある JOUI（ジェー・オー・ユー・アイ）という放送局のカードは、山口県下関市にあつた NHK 放送局のものである。当時の NHK は、民放に比べてなかなかカードを発行してくれなかつたという印象を持っている。

DX（遠距離）受信の熱がさらに高まり、短波帯を受信すると外国の放送を聞くことができるという話を聞いて、海外放送の受信にも興味を持つようになった。とは言え、そのような短波放送を受信できる高級ラジオは買えないから、受信機は自分で作るしかなかつた。

ラジオ雑誌に載っていた製作記事などをもとに、いろいろな短波帯の専用受信機（0-V-1、0-V-2 など）を作つたりしてみたが、結果的には中波用の 5 球スーパーの受信周波数を変えて、短波帯を受信できるように同調と局発のコイルを巻きなおしたものが一番良かつたようだ。そして屋根の上に受信専用のワイヤーアンテナを張つたりして、海外の放送局を追いかけて、その受信（BCL）に熱中したものであつた。

当時の海外の放送局も、サービスとしてベリカードを発行していた。ヨーロッパでは BBC（イギリス）、Radio Moscow（旧ソ連）、アメリカでは VOA（Voice of America）、アジアでは Call of Orient（フィリピン）、北京放送（Radio Peking）、平壤放送（Voice of Pyong Yang）、Voice of Vietnam（ベトナム）などの放送局が、さらに南アメリカでは Voice of Andes（エクアドル）、オセアニアでは Radio Australia（オーストラリア）などと、多くの放送局が自国から海外向けの放送を行つており、信号も強く受信しやすかつた。また、日本語での番組を放送しているところもあつたりした。それらを受信してはレポートを送り、ベリカードを得ることに熱中したものであつた。



私がアマチュア無線を意識し、興味を持ちはじめたのは、この頃であつたと思つている。

自作のラジオ(改良型5球スーパー)で海外の放送局などを探していると、きまった周波数帯(Band)で英語まじりの日本語の通信が聞こえるのだ。

「Hello CQ CQ CQ こちらはJA9〇〇……(中略) こちらの送信機は807シングル、受信機は高1中2スーパー、アンテナは10mHのダイポールです……(略)」私にはこれがハムの電波であることがすぐに分かった。

ちなみに、この頃のアマチュア無線界にはまだSSBの電波形式の局が出現しておらず、Band(通信帯)内はAM(振幅変調)の電波で充満していた。そこはAM電波特有の混信(と、言うより、混変調と言ったほうが良い)によるビート音が重なり、まるで蜂の巣をつついたような感じで、昼夜を問わずBand全体が「ウーン」と唸っているように聞こえていた。このようなビート音や混信から逃れるためにOff Band(決められた周波数帯を逸脱)して電波を発射している局も多かった。これらの局は、わざと(意識的に)Off Bandしており、明らかに違反を承知で電波を発射していると思われた。中には発信元がわからないように考えたのか、「JA10(テ)〇〇」などとでたらのコールサインを言っている局もあった。(日本のアマチュア局のコールサインは、地域ごとに指定されたJA0(ゼロ)からJA9(ナイン)までとなっており、JA10(テン)というコールサインは存在しない)

自作のラジオで放送などを受信した時、テストオシレータ(周波数発振器)などのように、周波数が正確に読み取れる測定器がないと、自作のラジオがどこの周波数帯を受信しているか分からないことがおきる。しかし、アマチュア無線のように、ひとところに多くの無線局がかたまっただけで電波を出している周波数帯が見つかる、非常に分かりやすいのである。したがってこのようなハムバンドは、BCLのバンドパイロット(受信周波数の手がかり)として便利なので、この蜂の巣をつついて大騒ぎになっているような、この「ウーン」を目印としてよく受信したものであった。

OM(先輩)の話によると、昔は「無線機は自分で作るもの」だったという。また、「無銭家」を自称するアマチュア局は、高価な部品を買う金がないので、代用のパーツなどを使って無線機を作ったりしたという。そうやって作り上げた無線機であったが、それを調整する機器も充分になかった時代だったので、自作機では往々にして予定外の周波数帯に電波が漏れて出たりすることも多かったという。そのような自作機から漏れ出たデコイ(囷:おとり)のような「幻の漏れ電波」を受信し、それに周波数を合わせて、一生懸命に呼んでいる局もあったという。最近の市販されている無線機ではそういうことはまずはないから、今では笑い話であろう。

アマチュア無線局がCQを出すとき、「CQ 80m」とか「CQ 40m」「CQ 2m」などとコールする習慣があるが、その裏にはこのような歴史があったと聞いている。

### ○ハムへの道はきびしかった(小千谷時代)

私は高校卒業後は大学へと進んだが、そこは電気工作や無線とはまったく縁のない生活だった。いや学業のことではない。貧乏学生の肩書きのとおり生活だったので、生活費稼ぎのアルバイトなどに明け暮れし、アマチュア無線のことなどはすっかり忘れていた。

昭和41年(1966年)4月、私は新潟県の新採用教員として小千谷市に赴任した。そして、その赴任した中学校の玄関先で、「JA0DC」というCall Signが書かれた車を見かけた。たった5文字のペイントだったが、それを見た私にはそれが何を意味するものであるかがすぐに分かった。まるで電気ショックを受けたような刺激だった。その出会いが、私にアマチュア無線を思い出させ、開局への道を歩かせるきっかけとなったようだった。

無線局JA0DCは小千谷市内で鉄工所を営んでいるOM(old man:先輩の意味)で、私の赴任した中学校の施設の修理などに来たりするアマチュア無線局だった。彼の仕事用の“足”となって

いた白いライトバンには、小型の無線機が積んであり、車体の後部には JAØDC の Call Sign が、黒いゴシック体のペイントで格好よく書いてあった。そして仕事の合間などに仲間と QSO (交信) している姿を見かけたりしたものであった。

以前から興味を持っていたアマチュア無線が、しかも目の前で行われているのを見て、これで見が覚めないはずはなかった。私は本屋に立ち寄ってはアマチュア無線関係の本 (CQ 誌など) を立ち読みしたり、無線機器の組み立ての特集記事が載った雑誌などに目を通したりするようになった。さらにアマチュア無線技師の免許を取得するにはどうしたらよいかなどを真剣に考えるようになった。だが、中学校教員の勤務はとても忙しく、無線技師の資格を取るための機会は全くなかった。

当時アマチュア無線技師の資格を取得するには、国家試験を受験するのが一般的な方法だった。しかも受験地が決まっており、信越地区 (新潟県と長野県) の場合は、長野市にある信越電波管理局で国家試験を受けることになっていた。小千谷市から上越線・飯山線・信越線と列車を乗り継ぎ、長野市まで出かけて行って国試を受験するには、1泊2日の日数が必要だった。おまけに試験の時期は春(4月)と秋(10月)の年2回と決められていた。

ところがその時期(4月・10月)の学校は、春は入学式関連の行事、秋は体育祭や文化祭関係などの重要な行事が集中しており、休暇が一番取りにくい時期でもあったのである。

国家試験は、受けることが出来れば合格できるという自信はあった。試験の時期が近づくたびに願書を取り寄せては提出し、学校勤務と国試受験日程の調整などにチャレンジしてみたが、残念ながら一度も受験できる機会はなかった。さらに、何千円もする受験料を無駄にしたという思いに上塗りされるように、電波管理局からは未受験なのに「不合格」のゴムスタンプの押された通知(はがき)が届いた。せめて「未受験」とか「欠席」など、何か別の表現で通知して欲しいと思ったものであった。

国試の受験以外の方法として、JARL の養成講習会を受講して免許を取得する方法があった。長岡でその講習会が開催されることを知り、それ (標準コース=約1ヶ月間) に申し込んでみようと思って問い合わせたりもした。だが、講習会が平日に開催されることや、欠席が多いと修了試験を受けさせてもらえないということだった。これでは国試よりもっと条件が悪く、結局は諦めざるを得なかった。

### ○受信機の製作と SWL 活動 (全知全能を注いで作り上げた高性能受信機)

下宿のあった小千谷から長岡までは 20 km くらいの距離があった。交通の便は割合良く、国鉄 (現 JR) や越後交通の路線バスなどが数多く走っており、長岡へはよく遊びに行ったものであった。

赴任して1年ほどたったあるとき、長岡のジャンク屋で、当時有名パーツメーカーだったアルプス社製の 3Band (550KHz~30MHz) の周波数帯が受信できるコイルパックを見つけた。そしてこれを超格安 (ただ同様) で入手した。私にとっては、それはごみの山の中でダイヤモンドを見つけたような気分だった。なぜなら、このコイルパックは、アマチュア無線局が運用している HF 帯 (短波帯) のほとんどの周波数帯が受信できるパーツ (部品) だったからである。

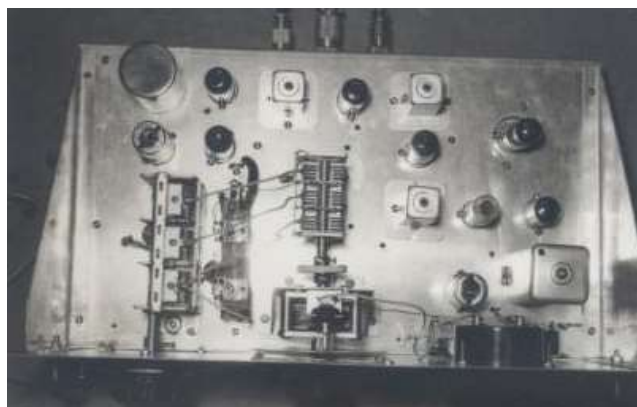




私はこれを使って短波受信機を作ることにし、さらに長岡のラジオ屋や東京の秋葉原へ通って部品を集めた。そして半年ほどかけて「高1中2」の受信機（高周波増幅1段、中間周波増幅2段の機能を備えた、当時としては標準的なアマチュア無線局の受信機）を作り上げた。しかし、残念ながらこのコイルは3Bandのうちの1Bandはうまく動作しなかった。

どういうわけか局部発信回路が動作してくれず、10MHzより上の高い周波数帯は受信できなかったのである。原因としてコイルの断線かショートなどが疑われたが、測定器を持っていない無銭家の悲しさで、原因の特定ができなかったのである。どうやらこの部分がうまく動作しないことが、このコイルパックがジャンクへの放出の理由だったようにも思えた。

この頃（1960年代後半頃）になると、アマチュア無線界にはSSB（Single Side Band）の波が入ってきて、かなりの局がSSBという特殊な電波形式でOn Airするようになっていた。特にOver Sea（海外）の局はほとんどがSSBで、復調回路の付いていない通常のAM受信機では、あの「モガモガ」の信号は聞き取ることはできなかった。



SSBという電波方式は、信号を乗せる電波をフィルターなどで半分に（狭く）して使う方式である。通常のAMの電波に比べて占有帯域（電波の幅）が半分になるので、混信に強く少ない電力でも遠くまで届くという実用上のメリットがあるとされている。その上に、音声などのトーンを変えることができるので、多少の混信や雑音があっても相手の信号が聞き分けやすくなる。そういうことから急速に普及したのであろう。

このような無線界のSSB化に対応するため、この自作受信機にもSSB復調用のBFO（喰り発振器）を組み込む必要があった。雑誌等の記事を参考にしたりしながら、感度を上げるために中間周波の増幅段を増やしたりするなど、改造に改造を重ねた。そして最終的には高周波1段、中間周波3段増幅、メカニカルフィルタ内臓、BFOや局発を安定させるためのスタビロ（定電圧放電管）を組み込んだ9球の2Band受信機を完成させた。

この受信機は我ながら非常によくできあがり、自信を持って自慢できる作品だった。市販されている既製品の受信機にも劣らない性能であろうと、ひそかに思っていたものだった。下宿住まいのため、外にアンテナを建てることができず、部屋の中を引き回した数本のロングワイヤーのアンテナだったにもかかわらず、3.5MHzや7MHz帯のアマチュア無線局や、海外からの短波放送の電波をしっかりと捉えてくれた。

JA0-1959というSWL（Short Wave Listener）コードを取得し、SWL活動に首をつっこんだのもこの頃であった。

画用紙をはがきくらいの大きさに切って、SWLカード（受信報告証）を作り、受信した信号の強さや了解度、雑音や混信などの状況を、受信したアマチュア無線局に送ったりした。

JA（国内）のアマチュア局のほとんどは、こちらの送ったSWLレポートを認めてくれ、レポート



を証明することを記した QSL カード（証明証）を返してくれた。

W（アメリカ）や KL7（アラスカ）などの Over Sea 局（海外局）も明瞭に受信することができた。そこにも SWL カードを送ったりした。だが、ほとんど返事（QSL カード）は送られてこなかった。

50 MHz の超再生受信機を試作したことがあった。某ラジオ雑誌（「初歩のラジオ」だったと思う）に載っていた記事をもとに、ありあわせのパーツで簡単に作れるということで、軽い気持ちで作ったものだった。だが、これが近所に TVI（TV Interference=TV 視聴障害）を撒き散らしていたらしいことを、あとになって知って驚くのがあった。

超再生という受信方式は、信号を発振気味にして受信するので、寄生振動の高周波（電波）が大量に発生する。この高周波は、50 MHz 帯ではカラー TV の映像周波数に近かったため、妨害電波となって TV に飛び込むことがあったのである。最悪のときは映像がまったく写らなくなってしまうという厄介ものだったらしい。加えて受信感度を上げようとして発振を強めると、さらに強い TVI が発生するという人騒がせものだったのである。それを知らずに、毎夜のように SWL 活動をやっていたのだから、近所の TV は大変だったに違いない。

そういう出来事（TVI=TV 障害）が、私の下宿のあった町内で起きているらしいことを、JAØDC 局らが QSO の話題にしていることをワッチしていて分かった。もちろん、その日のうちに超再生受信機の使用を中止したことは言うまでもない。それまでも何枚かの SWL カードを発行していたのだが、それには超再生受信機を 0-V-1（3 球短波受信機）と記入していたので、このときの TVI 騒動の犯人は私だと、おそらくバレてはいないと思うのだが……。

そういえば、この頃だったと思う。何でもない TV のトラブルに、呼び出されたことがあった。下宿の家人から「TV が映らなくなったから見てくれ」との声がかかった。修理道具一式をもって TV の部屋へ行ってみると、なんと TV の電源コードがコンセントに挿入されていなかった。（これではどんな高級な TV でも映るはずがない）電源のプラグをコンセントに差し込んでワンタッチで修理完了となった。

（やはりバレていたのだろうか。そしてその報復のいやがらせにわざとプラグを抜いておいたのだろうか？）

### ○国試受験（文字通り一発勝負だった）

昭和 44 年（1969 年）春、私は小千谷市から糸魚川市の中学校へと転勤した。小千谷に勤務していた冬の間、アマチュア無線技師の国試の受験願書を出しておいたところ、年度末になって長野市の信州大学の会場で、4 月 2 日に試験を実施するとの通知と受験票が届いていた。今回も転勤（異動）が絡むため、受験日程としてはあまりにもタイミングが悪く、受験は到底無理であろうと半ば諦めていた。

しかし、4 月 1 日（異動日）に転勤先の学校に赴き、上司（校長）に翌日の休暇を申し出たところ、あっさりと OK がもらえたのである。声こそ出さなかったがこれには跳び上がって驚いた。私にとっては“青天の霹靂”とでも言うのか、「こんなのあり？」という感じだった。

本当にこれには“びっくり”というより内心うろたえてしまった。予想もしなかった OK の返事だったのである。なぜなら、これまでの勤務校では、休暇はゆとりを持って事前に申し出るようになっており、県外への旅行などはたとえ日帰りであっても、行き先や連絡先を明示した、いわゆる旅行届を提出し承認を得るといふ、面倒な手続きをしなければならなかったのである。

こういうチャンスはもうないであろう、私はこのチャンスに賭けることにし、その日のうちに行動を開始することにした。 予定していた小千谷の下宿へは戻らず、引越しの予定をキャンセルし、受験票を入れたカバンだけを持って長野行きの列車に乗ったのである。 結果としてこのたった 1 回のチャンスが、夢の実現へとつながることになったのである。

国試受験は諦めの気持ちのほうが強かったので、受験勉強はほとんどしていなかった。 試験場につくまでは不安もあった。 だが試験中は割合ヒマで、時間をもてあました。 試験開始後、しばらく経ったら「終わったものは退室しても良い」との声がかかった。 答案はほぼ埋め尽くしており、退出しても良かったのだが、せっかく長野まで時間をかけて来ているのだから最後まで居てやろう、と言うわけで、ポケーっと窓の外を眺めたりして時間をつぶした。 窓の外は、信州の雪のない冬枯れの木立の景色と、春の乾いた風の吹く穏やかな快晴の天気だったことを覚えている。

昭和 44 年 (1969 年) 5 月 19 日、待ちに待った合格通知が届いた。 その日のうちに、近所にあった医院へ行って健康診断を受けたり、無線従事者免許証の申請書に添付する収入印紙などの購入などに走り回ったりしたものだ。

### ○そして開局 (したのだが……)

国試の合格通知から約 3 ヶ月後の 8 月の中旬、アマチュア無線局の免許が郵送でとどいた。 呼び出し符号 (コールサイン) は **JAØGUX** (ジェイ・エイ・ゼロ・ジー・ユー・エックス)。 私はこのコールサインを口にしたとき、すごく響きの良い、無線局らしい、いいコールサインだと思った。

開局のときに免許申請した無線機は、TRIO 社 (現 KENWOOD 社) の TR-1000 という無線機 1 台だけだった。 この無線機は、水晶発振、50 MHz、A3、出力 1 w、そして 1.5m のロッドアンテナを内蔵という、当時としては数少ない携帯式の無線機をうたい文句とするトランシーバーであった。

電波管理局へは無線機の取扱説明書に書かれているとおりに、出力が 1w の無線局として免許申請をしたのだが、どういうわけか免許状の方には 10w と書き足されていた。 電波管理局の審査官のほうで善意で (勝手に) 書き添えてくれたのだろうか。

LOG (無線業務日誌=永年保存している) に記載された無線活動の内容を見ると、記念すべき開局第一声の 1st QSO (初交信) は、昭和 44 年 8 月 15 日、19:50 から 10 数分間、相手局は JAØFZU 局 (糸魚川市) となっている。 10 数分間も何を話したのだろうか。 よく覚えていない。 おそらく自己紹介などを主とした内容の交信であったのだろうと思う。 そして、電波を発射したところは常置場所 (固定) ではなく、糸魚川市内の上刈というところまで車で移動しての運用だった。 この 1st QSO が常置場所ではできなかったこと、これには深刻な理由があったのである。

無線機の常置場所として届けた根知の「根小屋」(下宿の所在地) は、糸魚川の市街地から 10km ほど内陸に入った、周りが山で囲まれた盆地状の谷の中で、TV や FM 放送などの受信状態は極めて悪いところだった。 もちろん地区内にはアマチュア無線局はなかった。 TR-1000 の内臓のアンテナでは電波の到達範囲 (サービスエリア) も狭く、下宿から CQ を出しても応答してくれる局はほとんどなかった。(時々かすかにノイズのような信号が入るときはあったが……)

そこで、内臓アンテナの使用をあきらめ、屋外 (部屋の窓から手を伸ばしたていどの軒先) に自作のアンテナを上げてみた。 さぞかし多くの局が入感し、快適な交信ができると喜びたかったのだが、それどころか、もっと大変な問題が待ち構えていた。

それは電波を発射するたびに下宿の TV に TVI（電波障害）が発生することだった。出力がたった 1 w の無線機の電波にもかかわらず、TV の映像は障害を受けて乱れ、何が写っているか分からなくなり、また音声の方には私の声が明瞭に入るといふ有様だったのである。「根知(根小屋)」がいかに電波に関して条件の悪いところであったのか、想像いただけるであろうか。

したがって、TV の放送時間帯（ゴールデンタイム時など）は下宿からの電波の発射は御法度ということになり、無線をやりたいときは無線機を車に積み、電波の飛びのよさそうな場所などに移動して、そこで無線機を運用するというようにしていたのである。

当時、青海町に JAØBNK というアマチュア無線局があった。この無線局は大変アクティビティが高く、無線の知識や製作等の技術にも優れており、意欲的に無線活動に取り組む OM（局長）が運用する無線局だった。根知と青海は 15km ほど離れており、途中には山あり川ありでももちろん見通しではないのだが、彼の技術や運用が良かったのか、ともかく BNK 局の電波だけは非常に良く届いていた。ほとんど毎晩のように QSO（交信）の相手をしてもらった。（といっても TVI 回避のため深夜にしか On Air できなかったのだが……）

BNK 局は海岸に近い国道に面したアパートの屋上に、いくつもの性能の良いアンテナを上げ、広いサービスエリアを持っていた。この局が能生方面や富山県、遠くは上越（旧直江津市）などの局と QSO しているときは、私のところでは彼の声しか聞こえない、ということが多かった。先方の局は聞こえず、BNK 局の声だけしか聞こえないのだが、それでもどんなことを話題にしているかが分かり、黙って聞いているだけでも無線活動への参考になることが多かった。

今から思えばこの局の存在が、私の開局当時のあの悪条件を克服するエネルギーになっていたのだろうと思う。そうでなければ「根知谷」の無線局はすぐに冷えてしまい、短期間のうちに「閉局」してしまっていたであろう。



### ○姫川クラブ（のちの糸魚川クラブ） に入会

私が開局した昭和 44 年頃、糸魚川市西頸城郡地域には、JAØCYK 局が会長を務める「姫川クラブ」（会員 21 名）という地域無線クラブがあった。BNK 局の勧めもあって、開局してすぐに入会した。クラブでは定期的に（月 1 回）ミーティングを開いて情報交換を行ったり、JARL の行事に合わせてコンテストや移動実験などを行っていた。

この定例ミーティングは私にとっては非常に有意義な集まりだった。話題になる内容も新鮮で興味深いものが多く、楽しく、翌月の開催が待ち遠しく感じたものだった。

特にきまりがあったわけではないが、ミーティングに出席する会員たちは、必ずといってよいほど何らかの（無線に関する）話題やパーツ（ジャンクを含む）を持って集まって来ていた。ミーティングの定例的な打ち合わせや連絡が終わると、みんなでその持ち寄ったものを話題に、情報交換をしたりパーツの交換をしたりしていた。私にとってはそれがまた楽しい場所と時間だった。

また、この頃は自家用車を持つものが増え、マイカーに無線機を載せるのが流行しはじめた頃で

もあった。どのような無線機が車載に良いのか、アンテナは車の何処につけたらよいのかなど、クラブ員が実験や試した結果などを話題に、食事（昼食）も忘れて話し合ったりしたものだ。特に 2m（144 MHz）用の 5/8λ のホイップアンテナが出回ったときは、そのアンテナの自作を試みる者も現れ、その制作のノウハウなどの情報交換が活発に行われたこともあった。

姫川クラブはのちに JARL 傘下の「糸魚川クラブ」と名称を変えた。活動はさらに盛り上がり、会員たちは互いに知識や技術、運用方法などの情報交換やコミュニケーションを深め、自分のレパートリー（得意な分野）を広げながら活動を盛り上げていった。

### ○6m(50 MHz)モバイル運用（そんなに格好良くはなかった？）

TR-1000 は、移動用に設計されたポータブルタイプの無線機で、乾電池を 8 個直列にして 12v で運用できる設計になっていた。車のバッテリー（12v）はもちろん、外付けの電源装置を使うと AC100v（電灯線）からも電源供給が出来るようになっていて、固定局としての使用も可能だった。また、この無線機は AM 専用機で、送信部は水晶発振（5 チャンセル）で定格 1w の出力があった。受信は VFO なので送受の周波数をずらしての運用（いわゆるスプリットフレケンシー？）も可能で、当時のまだ真空管式が全盛という無線機時代にあっては使い勝手の良い、画期的な（？）ソリッドステート無線機だった。

しかし、この無線機にはいくつかの難点（使用の際の注意すべき事柄など）があった。それは外装のケースが鉄製で、つくりは非常に頑丈なのだが、電池 BOX に 8 個の単一電池を挿入すると、移動用としてはかなり重くなることだった。また、電波形式が AM（A3）でスケルチがついていなかった。このため車のエンジンから出るイグニッションノイズを拾いやすく、エンジンがかかっている時や走行中は、スピーカーからのノイズ音（雑音）がひどく、ほとんど交信できない状態だった。特に空冷エンジンを搭載した軽自動車（ホンダの N360 やスズキのフロンテ）などは最悪だった。さらに、この機種は半導体（トランジスタ）に PNP 型が使われていたため、プラス接地仕様となる無線機だった。（普通に考えた場合、車載機はマイナス接地にするなど、統一したほうが扱いやすいのではないかと思うのだが……）したがって車のバッテリーから電源を取ろうとすると、電源の極性（プラスマイナス）やアースの取り方を間違えると、ショートして火花が出たりヒューズが飛んだりするなど、車載用としてはかなり注意が必要だったのである。

当時、私は軽乗用車（排気量 360cc）に乗っていた。そしてそのリヤバンパーに 50 MHz の 1/4 波長にあたる 1.5m のホイップアンテナをつけて運用していた。その姿は、佐々木小次郎が長刀を背負っている姿を連想するかのようで、外観は格好よく見えたかも知れない。しかし、車のつくり（構造や鉄板）が普通車に比べて薄く弱かったため、アンテナを支えるバンパーなどは大きな力がかかるとゆがんでしまうことがあった。そのためスピードによる風圧や凸凹道での車の揺れに気を配ったものである。特に鉄道の低いガードの下などを通り抜けるときは、アンテナが桁にひっかからないか神経を使ったものであった。

この頃、新潟県の警察は 30 MHz の周波数帯を警察無線に使っていたらしく、パトカーは 2m くらいのホイップアンテナをリヤバンパーにつけ、それをゆさゆさとゆすって走っていた。アマチュア無線の 50 MHz 用の 1.5m のアンテナは、外見上は警察無線のそれに近く、傍から見るとパトカーの真似をしているように見えたであろう。



## ○HFへ進出

車載の 1w の無線機では、いくら頑張ったところで、電波の届く範囲はたかが知れていた。だが、私の中ではもっと遠くの、たとえば日本列島全域を対象とした地域（県外）の無線局とコンタクトしてみたい、できれば外国とも交信してみたいという、遠距離局との交信の挑戦の意欲は強かった。

開局して半年ほどたった昭和 45 年 3 月、新しく無線機を購入した。無線機は八重洲無線の F-50B ライン（送信機 FL-50B、受信機 FR-50B のセパレート型）だった。この無線機は黒いケースに、前面パネルが白（銀色だったかな）の垢抜けしたデザインの新鋭機だった。

アンテナは宿の建物に立てかけてあった長さ 10m ほどの竹の棒を一本拝借して、ダイポールアンテナとするつもりだったが、エレメントのスペースがとれず、逆 V の形に上げることにした。そして、一本のアンテナで 7 MHz と 21 MHz の両方に On Air ができるように調整をして使用することにした。

この F-50B はオール真空管使用の無線機で、VFO の安定度がやや気になるところもあったが、これまでの 50 MHz 帯だけという、私の狭かった無線活動の幅を大きく広げてくれた。なにしろ根知の山の中から、全国のアマチュア局と交信できるようになったのである。

LOG（運用日誌）を見るとこの頃から急に QSO（交信）の数が増えている。QSL カード（交信証）の発行枚数を無線活動の活発さの目安とするなら、50 MHz のみの QSO で発行した QSL は半年間で 100 枚ほどにしかならなかったのに、HF（短波帯）に On Air するようになってからは、1ヶ月で 100 枚を越えるようになった。

また、この頃はちょうど大阪万博の開催期間中で、記念局の JA3XPO が万博会場から連日 On Air しており、日本中がお祭りムードの中で、アマチュア無線界は HF に限らずあらゆる Band がにぎわっていた時期でもあった。さらに、記念 QSL や Award（賞）を発行している無線クラブがあり、そのクラブの指定した地域の無線局は引っ張りだこで、パイルアップ（多くの局から一斉に猛烈に呼ばれること）になったりしていた。私の感覚では、この頃は日本中のアマチュア局がすごくアクティブに活動していたように思われた。

このようにアマチュア無線界がすごく盛り上がっていたところに、華々しく(?) HF デビューをした JA0GUX だったが、その運用もたった 10w の出力で、しかも竹竿にくくりつけたような簡単なアンテナに加え、山の中というロケーションではやはり限度があって、思ったほど多くの局との QSO はできなかった。特に FR-50B の VFO が動く（時間とともに周波数がずれていく）ため、長話しをしていると交信中に相手局を見失ったり、ハイパワーの局につぶされて交信が尻切れになったりすることも多かった。私の運用テクニックが下手だったせいもあったかもしれないが、パイルアップになっている局（特に珍しい地域の局）などは、いくら呼んでも相手にしてもらえなかった。

だが、このような悪条件にもかかわらず、JA0GUX は粘り強く無線活動を継続し、多くの感動やサプライズを体験するのである。

## ○最初の Over Sea's QSO は DL（西ドイツ）だった

1970 年（昭和 45 年）9 月 30 日、この日はずっと DX（遠距離）とのコンディションが開けていて、21 MHz ではフィリピンの東方海上を移動（航行）する JA4 の MM（船舶）局が SSB ですごく安

定して入感していた。この局との QSO が終わったあと “サプライズ” があった。

CQ を出したところ Over Sea (海外局) からいきなり Call されたのである。私にとっては初めての海外局との交信だった。低い男の声で聞き取りにくかったことや、ノイズが少しからんでいったこともあって、コールサインを確認するため何度も呼び合ったことを覚えている。相手局のコールサインは DLØBO といい、OP (オペレーター) の名前を Wolf といった。

あとで調べたところ西ドイツの大学のクラブ局ということが分かった。

(当時は米ソの冷戦時代で、ドイツは東と西に分断され、コールサインが違っていった時代だったのだ)

交信は英語で話したと思うのだが、よく覚えていない。おそらく、しどろもどろに近い状態だったのだろうと思う。QSO を終わったあとはしばらく興奮状態だったことだけはしっかり覚えている。なにしろ、根知の谷から地球の裏側のヨーロッパの局とコンタクトできたのである。

(確かに私の電波はヨーロッパまで届いたのだ)

数ヵ月後、写真のような QSL カードが送られてきた。



### ○6m (50 MHz) から 2m (144 MHz) へ

50 MHz 帯の電波は、発信地点と受信地点を結ぶ空間を、地表に沿って一直線に飛ぶと考えられている。このような電波は “直接波” と呼ばれている。無線機の出力やアンテナの性能、見通しの有無によっても異なるが、この直接波は普通の状態では数 km から数 10 km くらいしか届かない。しかし、時々地表から 100 km くらいの高さの宇宙空間に、スプラディック E 層という電離層が、電子密度の高い状態で発生することがある。このとき、その電離層での電波の飛び方 (反射や散乱のしかたなど) が変わったりして、とてつもなく遠くまで電波が届くときがあるのである。

この現象は「E スポ」と呼ばれ、年中を通して発生しているようだが、とりわけ初夏の頃に多く発生する傾向がある。残念ながら毎日発生するということは期待できないようだ。だが、一旦 E スポが発生したりすると交信距離が飛躍的に伸び、何 100 km、何 1,000 km も離れた地域の無線局との交信が可能になる。今まで聞こえなかった地域の無線局がいきなり聞こえ始めたりするので、バンド内は蜂の巣をつついたようににぎやかになる。私も 1w とホイップアンテナの TR-1000 で、根知谷から長崎市や八代市 (熊本県) の局と QSO をしたことがある。E スポによる遠距離交信の日本記録は、地球の裏側の南米の局との交信だそうだ。

この E スポはいつ発生するか分からないし、逆にいつ消滅するかも分からない。だから、交信相手の局とコンタクトできたとしても、途中で尻切れになったりすることもあって、賭けのようなスリリングな QSO になる。そういうことを心得た上で E スポに期待して CQ を出すのも楽しみの一つでもある。

糸魚川クラブの活動はロールコール (無線でのミーティング) が計画的に実施されるなど、組織的な活動が展開され、その活動意欲は一段と高まっていた。当然無線によるクラブの連絡事項が多くなり、はじめは 50 MHz 帯 (6m) で行われていたロールコールは、ノイズが少なく安定して QSO のできる 144 MHz 帯 (2m) へと移って行った。2m の Rig を持ってない局は、ミーティングに参加できなくなり、つんぼ状態におかれるようになったのである。根知の谷の中でたった 1 局、6m でがんばっていた当局もこれにはお手上げだった。

昭和 45 年 10 月、当時としては小型軽量で最新型だった TR-7100 (出力 10w、F3) という車載

用のトランシーバーを、ひと月分の給料をはたいて購入した。この無線機は水晶発振による12チャンネルの送受信ができる2m専用機で、運用周波数が高くなった分、アンテナは小さくて済むというメリットがあった。さらに車載用ということから小型軽量の上に操作もしやすく、なかなか使い勝手の良い無線機だった。機器の性能が良くなったせいもあってか、下宿でのTVIの発生もほとんどなくなり、簡単なアンテナでも電波はよく飛んでくれた。さらにスケルチ機能の効果により、待ち受け時の雑音(ノイズ)に悩まされることもなく、部屋にいるときはほとんど毎日(終日)ワッチできるようになった。

この新しい無線機が加わったことによって、局免許の変更が必要になった。そしてその変更申請の手続きのときには、電波管理局に提出する書類をすべて手書きで作製するという、今では考えられないことをやったりした。

手元にあった海外向け郵便の便箋用紙(少し薄めの上質紙の便箋)を使用し、変更申請書の形式(様式)をそっくりボールペンで手書きして写した。このときカーボン紙を使って複写し、正副2通の申請書類を作成した。そしてこれに手数料の収入印紙をはり、返信封筒を同封して電波管理局あてに提出したものだ。

当時はまだ電子コピーなどは普及しておらず、JARLの保証認定制度も確立されていなかった時期でもあり、開局や変更申請の手続きは、無線従事者(免許人=無線局長)が直接電波管理局に申請書を提出して承認をもらっていた時代であった。悪筆で書かれた非常にお粗末な変更申請書だったであろうと思うが、数ヵ月後には信越電波管理局長の名前で(でっかいはんこが押されて)変更が承認されてきた。

このような手書きの申請書は、今なら当然NGとなるかと思う。アマチュアの無線家(無銭家)が申請用紙すらも買えなくて、用紙までも自作しているその涙ぐましい努力に、当時の信越電波管理局という役所は、大らかであったのだろうと解釈している。また、何枚もの手書きの書類を書いた自分にも、我ながらがんばったものだと思っている。

### ○DXを期待して上げた7エレストックアンテナ(上げたところは田んぼの真ん中だった)

根知の谷では標高1400mの駒ヶ岳のすばらしい大岸壁や、日本百名山のひとつである標高1963mの雨飾山の名峰を背景に、農道に沿って何本ものハサ木が立ち並び、日本の原風景を思わせるような、のどかな水田風景を見ることができた。決して住み心地の悪い場所ではなかったのだが、無線局の常置場所としていたところは盆地の底のような場所で、こと周波数の高いV・UHF(超短波・極超短波)帯の無線の電波の飛びに関しては、BF(Fine Business=「すばらしい事」の頭文字FBの反対語)などところであった。

開局したての頃は内蔵ホイップだけのアンテナだったが、のちに部屋の窓の外側に鉄パイプを立て、それに手作りのGP(グランドプレーン)やDP(ダイポールアンテナ)を乗せたりするなど、いろいろと自分なりに工夫を重ねたものだった。とはいえ無線の運用の限度は見ており、根知谷のロケーションではアンテナをいくら高く上げてV・UHF帯では、電波の飛びはこれ以上望めないだろうと、半ばあきらめたりもしていたものだった。

無線の電波のうち、VHFやUHF帯などの周波数の高い電波は、見通しの場所では直接波として飛び、「高い山などに当たると反射する」ようだ、ということは本などを読んで知っていた。実際にBNK局が430MHz帯で運用していたときの話として、「能登半島の方にビームアンテナを向けたら、バックにあたる長野県の局が聞こえたことがあった」という体験談を聞いて、電波の山岳反射は本当に起きるようだと思うようになった。そして、もし駒ヶ岳の岸壁にビームアンテナなどでねら



いをつけ、電波をぶつけるようにしたら、反射した電波はどこまで届くものだろうか、と思ったものだった。そしてそれを確かめてみたいと思うまでになった。

下宿の部屋の窓から 40m ほど離れたところの田んぼの畦に、少し丈夫そうなハサ木が立っていた。このハサ木にビームアンテナを上げて電波を飛ばすとどうなるか。少なくともアンテナが建物から離れることによりロケーションは良くなるから、おそらく今より電波の到達距離は延びるであろう。これはぜひ確かめてみたいと強く思うようになった。私のチャレンジの虫がモゾモゾと頭を持ち上げ始めたのだった。

ハサ木の持ち主である下宿の主人に、アンテナ設置の許可を求めに行ったとき、説明を聞いたオヤジさんはびっくりした顔だった。そして思ったより快く承諾をしてくれた。だが、おそらく腹の中では、「この男いったい何を考えているのだろうか？」と思ったに違いない。

その当時の私の頭の中は、無線のことで一杯だったのだろう。生活のすべての歯車が“無線”を軸に回っていたのかもしれない。

アンテナを建てるといっても技術的にはそんなに難しくはなく、田んぼのあぜに立っているハサ木の一本に鉄パイプを抱かせ、その上にローター(アンテナの方向を変える回転機)とアンテナを乗せるだけだった。むしろ問題は、ローターの電源ケーブルとかアンテナへの給電ケーブル(10D2V というかなり太い同軸ケーブル)を、そのハサ木までどうやって導くかだった。空中にワイヤーを張ってケーブルを引く方法は、工事が大がかりになって金銭的に難しくなるのと、冬には積雪に耐えられなくなるだろうということでやめにした。(積雪は例年、2m を超えるくらいになる)

いろいろ考えた結果、最も簡単な方法の地べたに這わせる方法にした。それでもノネズミにケーブルの被覆をかじられたり、風雨などにさらされたケーブルの被覆が劣化し、凍って割れたりしてケーブル内に水が入ったりしないかという心配があった。だが、結果的にはその心配はまったくなかった。

ともかくアマチュア的な発想と、アマチュア的な工事で、部屋から約 40m 離れた田んぼの真ん中に、地上高 6mH の 144 MHz (2m)用 7 エレスタックアンテナを上げることができたのである。

その結果、宿での TVI はまったくなくなり、それまで聞こえなかった遠方の局がかなり聞こえるようになった。特に駒ヶ岳の岸壁を使つての反射や回折による電波伝搬が良い結果をもたらしたようだった。糸魚川市内の固定局はほとんどカバーできるようになり、国道 148 号線を走るモバイル局とは、トンネルやスノーシェッドの中を除くと糸魚川から小滝までの間の QSO ができるようになったのである。私としてはこの成果は大満足だった。

このアンテナで根知の谷の中(無線機常置場所)から 144 MHz (2m)FM で最も遠くと交信できたところは、新潟県内では白根市の固定局(局間距離約 150km) だったように覚えている。

### ○移動運用 (高台を求めて……)

無線の電波の飛び具合に関しての根知谷は、いくら性能の良いビームアンテナを使ったとしても、届く距離にはやはり限度があったように思えた。遠くまで電波を届けようと、無線局の送信機の Power を上げれば TVI などの電波障害が発生することになり、また遠方からはるばるとやってくる相手局の電波は山かげになったり、反射したりして弱められ、無線局には良くない条件ばかりの



環境だった。もちろん放送局から送られてくるテレビやラジオなどの放送電波も極端に弱く、地区ではTVの受信は共同受信システムなどで視聴している家も多かったのである。

このことは根知谷だけでなく、糸魚川市内や近隣の谷すじではどこも同じであろうと思われた。特に、V・UHF帯で運用する条件としては良い場所がほとんどないであろうと感じていた。もっとロケーションの良いところ（高台など）があって、そこで運用すれば電波はもっと遠くまで届き、もっと多くの局と交信できるであろう。そういう思いから、ロケーションの良い場所を求めて、糸魚川市内や近辺のいろいろな場所を車で走り回ったものだった。

狼煙砦で有名な親不知の勝山や早川の不動山を皮切りに、美山のTV塔、能生の太平寺、名立の大峰山など、当時の糸魚川市・西頸城郡の高台の中で、車で行ける所には、足繁く足を運んだものだった。その結果、移動運用に最良の場所は旧名立町の鳥ヶ首岬の高台であろうと思われた。

この高台は海上保安庁の灯台がある大変見通しの良い場所で、特に西方向は日本海や能登半島に面し、富山・石川方面に開け、東側は新潟・長岡方面にも開けている絶好の場所だった。もちろん風景だけでなく、電波の飛びのロケーションとしても良い条件に恵まれていた。とりわけV・UHF帯でのJA9方面との交信に適しているようだった。私はBNK局と一緒に、車にアンテナやテント、発電機などの無線機材一式を積んで、たびたび出かけたものであった。

JARL北陸支部では、「JA9VHFコンテスト」という50MHz以上のV・UHF帯の周波数でJA9エリアのアマチュア局の交信局数を競うコンテストを実施していた。JA9エリアの局はどここのエリアの局と交信してもポイントになるのだが、私たちはJA0エリアの局のため、JA9の局との交信しかポイントにならない。圧倒的に私たちにとっては不利なコンテストだった。それでも数多く交信すれば入賞の可能性があるということで、このコンテストにはBNK局とともに積極的に参加した。そして144MHzと430MHz帯で3年連続首位を獲得したこともあった。この場所はそのほかの無線のコンテストでも入賞が狙える場所でもあったのだ。

糸魚川市や西頸城郡という「地域」からのOn Airは、V・UHF帯では他のエリアの局にとって「珍局」だったらしく、固定局でなくても頻繁に呼ばれたりした。ましてやEスポが発生したときやコンディションが良くなったときなどは、遠くの局からも盛んに呼ばれ、コンテストそっちのけでJCC・JCGサービスになったりしたことが何度かあった。

このような移動に適した場所の候補としては、アンテナの建てられる場所へ車で乗り着けることができ、器材等の運搬が容易であること。雨露をしのぐテントの張れる場所であること。夜通し発電機が運転できるところ。（発電機のエンジン音は結構うるさいのだ）そして焼肉などの調理（食事）のできる場所などの条件が満たせるところでもあった。

人里はなれた山の上などの高台で、一晩中発電機を回して明かりをつけ、英語だか日本語だか分からない怪しげな、暗号のような言葉で変な通信をしている。このような通報が、おそらく警察署などに行ったものであろうか、移動運用中の深夜にパトカーの訪問を受けたこともあった。だが警察官も私たちを見て「何やってんの？」といった感じで、特に取り調べのような事情聴取を受けたことはなかった。私たちの方も悪いことをしているという意識はなかったもので、平然としたものだった。しかし、今から思うと当時は、某国による日本人拉致事件が勃発していた時期でもあったので、治安当局はかなり神経を使っていたのであろう。

多数の局と遠くの局とQSOをしてみたいという、ただそれだけのねらいで、遠くは赤城山（群馬県）や八方山（長野県）まで出かけて行ったこともあった。しかし、そういうところはロケーションが良すぎて、あらゆる方向からの電波が入感するため混信がひどく、持って行った固定チャンネルのトランシーバーではほとんどQSOにならない、ということもあった。

## ○自作機器（根知時代）

私はもともと機械いじりや工作は嫌いではなかった。中古の機器や廃棄された機器からパーツをはずしたりする「部品取り」も楽しい作業だった。特に部品を取り付けてあった“ビス”と呼ばれる「小ネジ」類は、取りはずしたら捨てないで徹底的にとっておくことにした。そのために整理箱を用意し、サイズや規格毎に分類していつでも使えるように保管したものだ。また、事業所などから廃棄されて捨てられた電気機器の中に、まだ正常に動作する「使える」機器などが見つかることがあったりした。こうした廃物パーツを使っていろいろな周辺機器を作ったりした。



今でも自信を持って紹介できる傑作（と自分では思っている）自作機器がある。そのうちのひとつに、リモコン制御の送受信装置がある。それを紹介しよう。

小千谷時代に、長岡のジャンク屋で掘り出してきた、中古の真空管式の FM チューナーがあった。最初はこのチューナーと自作のステレオアンプで、FM ステレオを聴く構想だったのだが、FM 放送の受信状況があまりにも悪い地域のため、放置されていたものだった。このチューナーを改造してワイヤレスマイクのスイッチの ON/OFF 操作によって、無線機の送受信を制御（コントロール）する装置を作った。（写真の上段中央）

この装置の原理は、FM 受信機の特徴とも言われる、無信号のときは FM ノイズと呼ばれる「ザー」という雑音が入り、放送信号が入ってくるとその雑音が止まることを応用したものである。この FM 特有の雑音（FM ノイズ）を拾い出し、ノイズのあるときに OFF、ノイズがなくなると ON となるようにリレーを動作させる回路を組み込んだ。

この装置のリレー回路をトランシーバーの外部制御端子（PTT 回路）につなぎ、音声出力を同じトランシーバーのマイク端子に入力させてやれば、ワイヤレスマイクの電源の ON/OFF スwitch の操作で無線機の送受信が制御でき、そのワイヤレスマイクに向かって話せば、その音声が無線機から送信される、という遠隔操作ができるようにした。

この装置は非常に調子よく働いてくれた。特に夜、布団などに寝そべってのローカルラグチューナーなどには効果があった。

この装置を使って受信機からの音声を、別のワイヤレス装置などで手元の FM ラジオなどに転送させると、無線機（室）から離れていても送受信が制御できるようになり、いわゆる局内レピータのようなリモコン装置として働かせることもでき、いろいろな使い方が楽しめた。

このチューナーは捨てないでとってあり、今でも電源を入れれば正常に働いてくれるだろうと思っている。だが、トランスレス式の真空管がどうなっているか、もしかしたら経年変化などによるエア抜けでもうだめになっているかもしれない。

別の工作例としては 2m 用の 5/8λ ホイップの自作がある。昭和 46 年（1971 年）頃、富山市のパーツ屋で長さが 130cm くらいのモービル用のホイップアンテナを見つけた。144MHz の電波は 1/4 波長が約 50cm、1 波長が約 2m だから、アンテナの長さも大体 2m くらいになるはずである。それにしては少し短いようなので調べたところ、5/8λ（波長）のアンテナだと分かった。（このとき

初めて  $5/8\lambda$  (ラムダ) という波長に 2m の電波が同調することを知った)

このアンテナはそれまで使っていた  $1/4\lambda$  のホイップに比べ、電波が良く飛ぶらしいことや、走行中の受信感度が安定することなど、すべてにわたって優れていた。このアンテナの特徴は根元にマッチング用のコイルが付いていることであった。当時としては性能面でも、値段でも安いアンテナではなかったので、作れるものなら作ってみよう、といった自作ムードがあった。エレメントとなる太さが 2~3 mm、長さ 1.5m くらいのステンレス棒はインテリアの店などで容易に手に入ることだし、このマッチングコイルが作ればアンテナは自作できるのではないかと、ということになり、測定器もないまま作ってみることになった。コイルの巻き数や径はすぐに分かり自作もそう難しくなかった。問題はそのコイルが変形しないように固めることや、ステンレス棒と銅線を半田付けで結合し、コネクタを付けたりする工作技術の開発だった。

いろいろ試行錯誤した結果、M 型の同軸コネクタ (MP7 くらいのもの) に合う太さの塩ビパイプ (長さ 10cm 位) の中に、自作のコイル (8T 位) を入れてエポキシ樹脂で固めることにした。少し長めにエレメントを作り、少しづつ切り詰めながら文字通り cut & try で調整した。ステンレスの半田付けは特殊な溶剤 (ペースト) の入手と使用により簡単にできることも分かった。こうして、実用上既製品と遜色ないほどの性能を持った自作  $5/8\lambda$  ホイップが完成した。

TR-7100 というトランシーバーの終段回路には、アンテナやケーブルへの給電に mismatch があった場合、電子部品の破壊を防ぐために、自動的に電波の発射を止める保護回路が組み込まれている。この保護回路の機能と、ラジケータを使った簡易出力計を使って、自作アンテナの調整などを良くやったものだった。(要するに保護回路が動作しなければ、そのアンテナは実用上のマッチングが取れており、かつ出力計が最大値となるように調整すればよい、という考えである) こういうアンテナなどの調整には、この TR-7100 の保護回路は「うってつけ」の機能だった。

昭和 47 年 (1972 年) の 10 月頃、ボールペンの軸に銅線を 10 数回巻きつけただけの 2m 用の短縮アンテナを作ったことがあった。雑誌 (CQ HAM) にヘリカルアンテナという名前で紹介されていたものを応用したイタズラ的な制作だった。この時の送信機とのマッチングのとり方も TR-7100 の保護回路を利用して調整したものだった。送受信アンテナとしての性能を落とさず、どれくらい短くできるものかを試してみたところ、軸長がおおよそ 5cm くらいまでなら実用になることが分かった。今ならもっと短くできるだろうが、当時としてはこれが限度かと思えた。しかし、このアンテナは雨に弱く、濡れるとまったく働かなくなる、という致命的な欠陥があった。

その他、車の中古バッテリーなどを利用して、半日か一日くらいの停電があっても、無線機やその他の装置が使えるように、無停電電源装置を作ったりした。

今から思うと、田んぼの真ん中のハサ木に、変なアンテナを上げてみたり、ガラクタのような変なものを持ち込んで何かを作ったりという、周りから見たら変わり者に見えたことであろう。

本業 (の仕事) を忘れて、趣味のアマチュア無線に熱中してのめりこんでいる、“オタク” と呼ばれる輩 (やから) か、変質者あるいは狂人と思われたに違いない。

### ○竹ヶ花で開局 (だが、期間は短かった)

昭和 48 年 (1973 年) 4 月、糸魚川市内の中学校へ転勤した。QTH (住居) を市内の竹ヶ花に移し、平屋の借家の屋根の上に、根知の田んぼに立てていたハサ木アンテナ (2m 用の 7 エレスタック) を組み立てなおして上げた。(地上高 7m くらい) 住居のあったところは国道に近い住宅地で、

海岸まで 100~200m ほどと近い、まったくの平地で電波の飛びが良く、VHF 帯でのサービスエリアは、根知の山の中とは比べものにならないほど広がった。しかし、HF 帯のアンテナ（全長 20 m ほど）が張れるほど敷地に広さがなかったため、HF での On Air はあきらめ、もっぱら 2mFM での運用を重点にすることにした。

近所（およそ 100m くらい離れたところ）に JAOSWS という強力な電波を出すアマチュア局があった。彼が電波を出すと、周波数が離れていてもこちらの TR-7100 はカブって（混変調を起こして）スケルチが開いて雑音が出たりした。おそらくこちらが電波を出せば、SWS 局の方もカブっていたにちがいない。悪いと思いながら電波を発射したりしたものだった。彼とはこのことでトラブルになるようなことはなかった。（と、私は一方的に思っている）互いに我慢できる範囲内での問題だったのだろう。

### ○平牛へ QSY（引越し）

昭和 48 年（1973 年）11 月、糸魚川市平牛へ引っ越した。平牛地区は、海川が谷すじから平野部に出たところの平地に開けた、住宅地と田んぼの混在する地域だった。糸魚川市の都市計画では文教地区に指定されており、住宅地としても開発が進むのではないかと期待され、大きな工場もなく、地域全体が落ち着いた雰囲気の良いところだった。住居のある場所は、地形的には山の懐（ふところ）に当たるところで、東側の方向に開け、駒ヶ岳、火打山、焼山などを見通すことができ、無線のロケーションとしては悪くはないように思えた。だが、反対側（西側）には京ヶ峰の山（標高 118.2m）が迫ってきており、V・UHF 帯では障壁となるであろうと思われた。

無線局の開局に当たっての事前調査では、周りには家屋が少なく、TVI（TV 受信障害）はほとんど心配ないことが予想された。根知時代にリモコンマイクとして使っていた、真空管式の FM チューナーとステレオアンプで、東京タワーから送信されている「東京 FM」の放送電波が受信できることが分かってくるなど、これまでになく期待が持てた。

無線活動の主力となるであろう V・UHF 帯のアンテナは、小屋根（平屋部分の屋根）に屋根馬を置いて、ハサ木アンテナに使っていた 144 MHz 用の 7 エレスタックと、435 MHz 用の 12 エレスタックのアンテナを積み上げるように据えた。そしてそれを回転させるローターも設置した。

アンテナの高さは地上から 7m ほどしかなく、二階の大屋根にも届かない高さで、あまり目立たない貧弱なものだったが、ロケーションがよかったせいか、JA1(関東)、JA7(東北)エリアの局が多数入感した。HF 帯のアンテナは、7 MHz 用の逆 V 型を 10mH に上げて On Air できるようにした。

### ○念願の自立タワー（その建設のエネルギーはどこから？）

昭和 46 年に、高田市と直江津市が合併して上越市となり、それ以後の新潟県内は、「平成の大合併」までの間糸魚川市を含めて 20 の市が存在していた。

私は無線活動の当面の目標として、Home QTH（自宅）から 144 MHz 帯でこの 20 市全部のアマチュア局とのコンタクトを目指すことにした。その理由の一つは、糸魚川は新潟県の西のはずれにあることから、東方向に開けた地域とはコンタクトできる可能性が高い（しやすい）と考えたのである。

だが、実際に運用をしてみると、なかなかうまく（コンタクト）できない市（地域）がいくつもあることが分かってきた。それらの市は、糸魚川から見ると遠いだけでなく、山や盆地などの地形的に“山かげ”にあたると思われる地域だった。とりわけ栃尾、五泉、十日町の 3 市からの電波は、他の市や地域からの入感があっても、平牛の Home にはほとんど入感しなかった。V・UHF

帯では、糸魚川とこの3市との固定局どおしの QSO は、至難の業であろうと思われた。

それに比べ、JA1 エリヤ (関東地方) の局はよく聞こえた。1 エリヤでは、V・UHF 帯で DX (遠距離交信) をねらう局は、性能の良いアンテナをかなりの高さに上げて運用しているらしいことも聞いた。私自身もこれまでの経験から、遠くの無線局との交信を成功させるには、性能の良いアンテナが重要であるとの認識を持っており、高性能なビームアンテナへの憧れがあった。

そういったことなどに刺激を受け、自分も性能の良いビームアンテナを上げて応じてやりたいと思うようになり、VHF DX への挑戦の意欲を高めていったものだった。

富山県の魚津市に「DX タワー」という、鉄骨製の自立四角タワーを販売している会社があった。この会社の商品は、さび止めとして亜鉛メッキを施した L アングルの鉄骨を、自分で組み立てるといふタワーキットだった。魅力は「亜鉛メッキ自立式」ということで、値段はステー式 (支線で支える方式) などの三角タワーなどに比べると少々高かったが、浮かれた DX への熱と暴走気味の若気の勢いとで、とうとう購入してしまった。

タワーの建設工事は穴掘りから始めた。深さが 1.5m 位の土台穴を掘り、タワーの基台をコンクリートで固めて埋めるのだが、場所が畑地だったところを宅地用に盛り土で埋め立てた所だったので、大きな石などが埋まっていたりして作業は楽ではなかった。おまけに深さが 1.2m ほど掘ったところからは水が湧いてきてそれ以上は掘れなくなってしまった。そこで、長さ 2~3m のパイプ (鉄くい) を数本打ち込んで基台を補強することにした。

タワーの1段目 (地下に埋まる部分) の組み立てや、タワーの垂直を出す作業は難しいと言われていたが、参考書を見ながら自分でやった。これは自分でもうまくいったと思っている。だが、コンクリートの打ち込みや鉄塔本体の組み立て作業は、一人では無理だった。ローカル (糸魚川市内) の無線局長 (BNK,FHE,PHB 局ら) に手伝ってもらったが、2日がかりの作業となった。

こうして昭和 51 年 (1976 年) 5 月、念願の Tower (20mH) が完成した。タワーの組み立ては手伝ってもらった作業だったが、それ以降の保守作業 (例えばボルトやナットの増し締めなど) や各種のアンテナの組み立てや取り付け、調整、その他のメンテナンスは全部一人でやったのである。

中でも一番大変だったのはアンテナマストの取り付けだった。このマストは、太さが直径 5cm、長さ 4m もある肉厚の鋼管で、重さが 30~40kg もあるシロモノだった。重い上に長いため、タワー上部の斜め材をはずさないと TOP (頂上の穴) に入らなかった。事前にパーツや用具などの準備、作業の段取りなどをきちんと考え、準備して取り組まないと大変だった。ともかくこれ 1本を引き上げて取り付けるために半日以上かかったように覚えている。



#### ○11 エレ 4 パラの威力はすごかった (組立作業もそれ以上に大変だった)

マスプロ電気という会社から、T-11 という 2m 用の八木アンテナが販売されていた。エレメント数は 11 本、ブームの長さが 4m ほどあるかなり大きなものだったが、アルミパイプの肉厚が薄く、他社の同格のものに比べて重量の軽いアンテナだった。(それでも 1本の重さは 4kg ほどあった) 値段もアマチュアとしては手ごろ (安価) だったように思っている。このアンテナは、肉薄の分だけ腐食に弱く、壊れやすい難点があったが、電気的な性能はかなり良いアンテナだったように思う。

東京の秋葉原の「ロケット」という無線機器を扱っている店からこの T-11 を 4 本購入し、4 パラ（4 本を並べて接続する）にすることにした。ちょうど手元に、根知時代にハサ木アンテナまで引いていた同軸ケーブル（10D2V）があったのでこれで給電し、Q マッチセクションは市販の同軸 4 分配器を使用した。なお、スタックブームは約 4m のコンジットパイプ（足場用鉄パイプ＝これも相当重たかった）を使用した。

最初の計画は T-11 という長さが 4m もあるアンテナを、地上に 4 本並べてブームを組み立て、SWR などの調整をしたあとそれをロープで引き上げるつもりだった。しかし、組み立ててみると思ったより大きく（6 畳間くらいの広さになった）、また重量もケーブル類を含めると相当重くなり、アンテナマストのように一人では引き上げられないことが分かった。そこで、クロスマウントと両端 2 本のアンテナを付けたブームを先に引き上げ、仮固定をしたあと残りのアンテナ 2 本と Q マッチ部分、ケーブル等を引き上げ、それらをタワー上で組み立てることにした。要するに小出しにして引き上げたのだが、その分タワーへ昇り降りの回数が増えることになった。

このタワーの昇り降りは、傍で見ていると大したことのないように見えるであろうが、実はすごい重労働なのである。何しろ自分の体重を垂直に持ち上げたり降ろしたりしているのである。そして、手順や段取りが悪かったりして部品が不足したり、工具などの忘れ物があったりすると最悪なのである。登る前に何度も手順を確認し、準備万端で登っていざ作業というとき、その不備に（タワー上で）気づいたりしたときは、情けない気持ちになってタワーを降りなければならなかった。

小物のパーツ（ビスやナット、ワッシャーなどで代替ができない部品）を落としたりしたときも同様だった。タワー上からパーツの落ちた場所をしっかりと見届け、タワーを降りてその付近を捜すのだが、小さいため簡単には見つからず、泣きたくなる時もあった。

ともかく昇ったり降りたりの繰り返しで、この 4 パラのアンテナの組立作業は数日かかったことを覚えている。

アンテナはケーブルとともに通常は雨ざらしである。したがってケーブルとアンテナなどの接続部分は雨対策の防水処理を施さなければならない。これには“自己融着テープ”というブチルゴムを主成分とする、粘着力の強い絶縁テープが市販されており、それを接続部に巻きつけることでケーブルや電線を防水する方法として効果があるとされていた。だが、このテープは値段が高いのが難点で、私はあまり使わなかった。私の場合は普通の電工用のビニールテープを分厚く巻きつける方法で防水処理を行うことにした。質の良いビニールテープで、しっかり工事をすれば専用テープでなくても、十分防水効果は期待できたようである。

いろいろな色のビニールテープでの防水処理を試してみたが、どちらかというと黒色のものがモチ（耐久性）が良いようであった。赤や青などの色物や白、黄、灰色といった色のうすいものはテープの「のり」の劣化が早く、はがれやすくなるのだ。これまでのところ、この黒テープでの防水処理は、漏水などによるトラブルは起きていない。

LOG（業務日誌）の記録を見ると、144 MHz 帯(FM・SSB)の 11el×4（4 パラ）での運用開始は昭和 51 年 5 月 5 日になっている。だが、はじめの頃はアンテナの調整が不十分だったせいかわ DX QSO の記録はない。しかし、6 月に入るとアンテナの調整が進んだのか、あるいは E スポの発生など、コンディションが良くなったのか、かなりの DX QSO が記録されている。

当時存在していた市・町名で書き出してみると、北は北海道の松前町を皮切りに、秋田市、盛岡

市、千葉市、鎌ヶ谷市、十日町市、飯山市、鴻巣市、流山市、松戸市、柏市、東京足立区、前橋市、須賀川市、真岡市など、これまで思ってもいなかった地域とのコンタクトができていたようだ。これらの地域の方向を見ると、Home（自宅）から見て北から南東にかけての地域になり、東北から関東東地方にかけてに集中しているようだった。また、真南の方向にも開けたところがあり、長野県南部の伊那市、飯田市とのコンタクトにも成功することができた。

ともかく焼山の方向にアンテナを向けておけばかなりの地域からの電波が入感するという、11エレ4パラのビームアンテナの威力が肌で感じられるようなすばらしい成果だった。しかし、西方向（関西方面）は京ヶ峰の山が障害となるのか、DXの信号はほとんど入感しなかった。

2m(144MHz帯)での運用で、新潟県20市の局のコンファーム（交信しQSLを得ること）にチャレンジしたことは前にも述べた。4パラのアンテナの威力はすばらしく、小気味いい切れ味で県内の各地域の局と、次々にコンタクトに成功していった。

リストを作り、コンファームできなかった地域をチェックしてみると、糸魚川から最もコンタクトが難しいところとして残った市（地域）は、五泉市と栃尾市、東蒲原郡の山間地だった。これらの市や郡は、糸魚川から見ると山かげになる地域で、U・VHF帯でのQSOには非常に条件の悪いところのようだった。

それでも休祭日の前夜などのOn Airや、VHFコンテストへの参加など、積極的にDX局を探してワッチしたものだ。そして、最後の最後に残った五泉市とのQSOに成功して、新潟県内20市のQSOを達成したときは、肩の荷が下りたような「ヤッター感」を感じたものだ。

昭和50~60年頃（1980年代）は、国内のVHF帯もSSB化が進み、2m（144MHz）のDX QSOにもすごく熱がかかった時代だった。タワーとアンテナが整った私も、VHFのDX QSOを求めてシャック（無線室）にこもることも多かった。

中でもJA1エリヤ（関東地方）の局にとっては、糸魚川の局は非常に“珍”だったらしく、たまにOn Airするだけでも県内外の多くの局から呼ばれたときもあった。珍局獲得をめぐっての騒動は、これまでもいろいろな事例を笑い話のように耳にしてきたが、今から思えば自分もその渦に巻き込まれた一人でもあったようだ。

珍局である私のコンファームがほしくてのあまりか、電波が届いていない（受信できていない）ようなのに、さも聞こえていますといわんばかりのレポートを送ってくる局があったり、私の方ではまったく聞こえなかったのにRSレポートを送っていないのに、（交信が成立していないはずなのに）一方的にQSLカードを送ってきたりする局があったりした。初めの頃はこのような局には赤字で「NO LOG」と書いてQSLカードを返したりしていたが、バカバカしくなったので無視することにした。また、どこで電話番号を調べたものか、私の自宅に電話をかけてきて「これから貴局を〇〇.〇MHzで呼ぶからコンタクトしてほしい」などと、スケジュールを求めてくる局もあったりした。

また、このようなときには必ずといってよいほど、QSOの「お世話」をする局が現れたりした。ロケーションやコンディションなどの条件が悪く、二局のQSOが困難で、たとえば電波が弱くてコールサインなどが完全に聞き取れていないようなときなど、このままでは交信が不成立になりそうなどきに、当事者の間に入って交信の仲介役をする「おせっかい」局のことである。

この仲介局は直接的には二局間の中継はしないといい、交信の手助け役という立場は保つようにはしているものの、時にはクイズのようにヒントを言ったりして、内容的には中継局のように間を



取り持ったりもするのである。私にとってはこのような行為は“中継交信”と同じように思え、あまり好感を持てるものではなかった。むしろ真面目にチャレンジをし、自力で交信を完成させようとしている局の邪魔に感じた。

この頃の JAØGUX が使っていた 144 MHz 帯の送信機は、TRIO 社の TS-700 というオールモードに対応できるトランシーバーだった。HF の機械を思わせる重厚な前面パネルを備え、VFO も抜群の性能を誇っていた。また、筐体が大きいので車載機としては不向きだったが、AC 電源が内蔵されており、固定局用の無線機としては非常に使い勝手のよい無線機だった。しかし、悲しいかな出力は 10w という、おとなしいトランシーバーだった。したがって、JA1 エリヤの Hi パワーの局に比べ、私の送信パワーは貧弱であることは火を見るより明らかだった。

私は“声”が小さいのならそのハンディを“耳”で補おうと考え、受信ブースターを作って受信機に取り付けたり、専用のヘッドホンでワッチしたり、ノイズの中に埋もれている信号を聞き分ける力を向上させる訓練をするなど、“受信感度”を上げる工夫をしたものだった。この点、平牛はノイズの少ない地域だったので、雑音の多い都会の局より耳のよさが発揮できたのだと思う。

あるとき、JA1 エリヤの局から、私に対して“Ø エリヤの耳の良い局”という賞賛の声をかけてもらったことがあった。この言葉は素直にうれしかった。

#### ○タワーやアンテナのメンテナンス余話

タワーを建て、アンテナを上げてしまえばそれで終わりというわけにはいかなかった。安全が保証され、安心して気持ちよく無線局を運用して行くには、さらに状況に応じた管理やメンテナンスを施す必要があった。たとえば、組み立て直後にはタワーの全ボルトの増し締めをする。雷対策としてタワーに避雷施設をつける。(タワー全体をアース接地するなど) 子供などが勝手に登ったりしないように、登り口のステップをはずしたりするなどの危険防止策を図ることなどであった。(ボルトの増し締めなどは、怠るとタワーが少しずつ歪んでくるという)

このタワーは、亜鉛ドブ漬けメッキの処理がされているので錆びない。だからペイントなどの錆止めは不要だという。だが、プロ規格に比べるとメッキの膜はやはり薄いということなので、組み立て作業や保守作業の時、鉄骨同士やパーツなどがぶつかって出来る小さな傷から錆が発生することもあるという説明だった。したがってアンテナを組み立てる時ばかりではなく、メンテナンスのために登り降りするときなどには、出来るだけパーツや工具などをぶつけないように気を配ったりしたものだ。

またこのタワーは、設計上の規格では 60m/秒の風にも耐えられ、70 年の耐用年数があるとの前宣伝だった。もちろんタワーはただ立っているだけではない。頭の上には何 kg もある大きく重いアンテナを乗せているのである。風の強い日には、風に吹かれたアンテナには横回転の、いわゆる“よじれ”の力を受け、それがタワーやアンテナへの負荷(ストレス)になるという。この力はアンテナの風を受ける面積が大きくなれば自分の重さとともに大きくなり、タワーが傾いたり、時にはローター(アンテナを回転させる装置)などを破損させたりすることもあるという。そういうことを意識しながら、風の強い日などにはタワーにかかる風圧が軽減するように、風向きに応じてアンテナの方向を変えたりしたものであった。

もうひとつ、「カラス」との根競べを紹介しよう。うら山の京ヶ峰の森には、多数のカラスが住み着いていて、一帯が繁殖地帯になっているようなのだ。事実、タワーから 50~60m くらい離れた杉林の中に営巣しているつがいがあったらしく、1 羽が見張り所として(私に無断で)タワーを

使い始めたときがあった。「なんだカラスがとまったくらいで目くじらを……」と言う人もいるかもしれない。確かにカラスが止まったていどでタワーは壊れたりはない。また、そんなに貧弱なアンテナを上げたりしてはいない。目くじらを立てたくなるのは、実は彼らの「排泄物」なのだ。彼らは飛翔中もそうだが、止まると必ずといってよいほどフンをする。そして雑食の動物でもある。(モノを見ると本当に何でも食べていることが分かる) 加えてスズメやツバメなどの「小鳥」に比べて食べる量が違う。当然排泄量も……。そのような彼らの「爆弾」が無線室の窓に降ってくる様子を想像してほしい。それも激しい音と強烈な臭い付きで……。

彼らの見張り所無断使用に対抗して、見つけ次第アンテナをゆすってみたり、大声で脅したり、ロケット花火などで脅したりもしてみたが、彼らも利口なものでこちらの方が軽くあしらわれている感じだった。いろいろやってみたが、どれもイタチごっこで、何か良い知恵はないものかと思案をしているところである。

さらにもうひとつ、タワーが建って間もない頃、夜、外出先から帰ってきてタワーを見上げたところ、頂上付近に黒い影が見えた。猫くらいの大きさに見えたが、月明かりも十分でなく何がとまって(登って)いるのか良く見えなかった。そのうち、その黒い影は「パサ！」という音とともに姿を消してしまった。カラスは夜空を飛ぶとは聞いていないし、おそらくムササビのような獣が登っていたのであろうかと思っている。翌日、念のためにタワーに登って点検をした。しかし、どこにも異常はなかった。何のためにどうやって登ったものだろうか？

#### ○ “何でも” 自作した (自称 自作バカ 別名 アマチュア無線工作士?)

免許を取得してからしばらく(数年)の間は、いわゆる「無線ごっこ」にハマった時期で、マイクに向かって盛んに「CQ」を連発し、相手かまわずの交信を試みたものであった。電波を発射できるという開放感に似た優越感と、未知の無線局(交信相手)との出会いに心を躍らせ、時間(ヒマ)さえあれば無線機に火を入れ、交信の相手を見つけてはQSOに没頭したものであった。QSOの内容はほとんどワンパターンで、自己紹介とQSLカードの交換の約束ということが多かった。

だが、もともと工作は嫌いな方ではなかった私である。次第にアマチュア的な発想のパーツ(例えばサイズの異なるイヤホーンの差込ジャックが使える“変換ジャック”など)を細工して作ったり、イタズラ感覚の(なくても困らないのだが、あるとなんとなく楽しい)周辺機器や、無線機の感度や機能性を高める装置(プリアンプなど)の設計や製作にのめりこむようになった。

幼い頃のラジオの組み立ての頃からもそうだったが、私は既製品を買って使うというより、自分で作れそうなものは作ってみたい、という意識を強く持っていた。たとえば、電線を使った簡単なつくりのワイヤーアンテナ(ダイポールや逆Vアンテナなど)は自作するもので、店に完成品として売っているものを買ってきて使うなどという意識は、持っていなかったのである。

機器や装置を作るために、新品の部品を購入することもあったが、多くは故障して放棄・遺棄された電気機器を修理して使えるようにしたり、まったく別の装置に改造したり、廃棄された無線機器(いわゆるジャンク品)を解体し、それらの部品で別の機器を組み立てるといった廃品利用はよくやった。ともかくいろいろなものを作って楽しんだものだった。

だが、これらはすべてが完成したり、成功したというわけではない。期待どおりに動作しなかったり、サイズが合わなかったり、未完成のまま放り出したモノもたくさんある。しかし、とりあえずモノになった(と自分で思って満足している)ものはいくつかある。それらを紹介しよう。

#### ・真空管式ステレオアンプの製作

小千谷時代に高 1 中 3 の受信機を自作したことは前に述べたが、この受信機を製作するとき、買い揃えた真空管の中に、オーディオ機器にも使えるものがいくつかあった。

「初歩のラジオ」という雑誌に載ったステレオアンプの製作記事を読んで、その製作にチャレンジした。このアンプは、片チャンネルに 2 本の真空管を用いたシンプルな回路構成で、工作する上でも特に難しいこともなく、ありあわせの部品の活用だったが、動作も安定してうまく働いてくれた。(まったく同じ部品を 2 組そろえるという努力は必要だったが……)

また、このときはアンプだけでなく、スピーカーボックスも自作した。厚さ 2 ㎝ほどのラワン板を使って 30×30×50 cm ほどの箱を作り、中にパイオニア製の 25 cm ウーハー (低音スピーカー) と径が 5 cm ほどのナショナル製のトゥィーター (高音スピーカー) を入れ、それらの音域をクロスオーバーさせるための、ネットワークというマッチング回路を作って結線するといった懲りようだった。このスピーカーボックスは今でも現役で働いている。音質もこの上なく満足している。

#### ・受信ブースターの作成と機器への取り付け

当時、「エリート無線」という会社から、MOS 型 FET というローノイズのトランジスターを使った 2m(144 MHz 帯)用の受信ブースター (機器内蔵型) が発売されていた。ちょうど VHF DX に熱がかかっていた頃でもあり、その効果を期待して TS-700 に取り付けしてみた。しかし、耳で聞いた感じのシグナル感度はそれほど向上していないのに、S メータだけが豪勢に振れるという状態になった。おそらくノイズも信号と一緒に増幅されるためにこのようになると思われた。どうも面白くないと思っていたところに、上越市の OM 局から、ガリウム砒素という半導体 (トランジスター) を使って、ローノイズの受信ブースターが作れるという情報をもらった。情報の発信もとに問い合わせると、その作成資料を送ってきてくれた。さっそくそのデータをもとに、銅版でたてよこ 3 cm 厚さ 1 cm 位の大きさのケース (小型のマッチ箱くらいの大きさ) をつくり、その中に前記のガリウム砒素半導体を使った増幅回路を組み込んだ受信ブースターを作った。そしてそれを TS-700 に取り付け運用してみた。結果は MOS FET よりかなり使い勝手のよいものだった。SSB での信号の了解度が数倍向上し、特に JA1 方面との QSO にはその効果を発揮した。(前述した“Q の耳の良い局”に貢献してくれたのだ) この受信ブースターは現在でも大体満足できる動作をしている。(でもやはり S メータは振れすぎかな?)

#### ・クロック IC を使ったデジタル時計の製作

足が 10 数本並んだムカデのような IC (集積回路) が量産されるようになり、いろいろな電子回路を作り出せるパーツとして安く入手できるようになった。このような IC のうち、タイマー IC と分周 IC を使って 1 秒間に 1 回のパルスが発生させ、それを時計の元クロック (秒針) として利用することを知った。そしてこれを利用してデジタル表示ができる置時計を作った。

この時計の原理は、AC100V のいわゆる 50Hz の交流パルスを元クロックとし、そのパルスを分周 IC とタイマー IC で 1 秒間に 1 カウントさせるようにしたものである。それで 8 セグメントの LED (発光ダイオード) を点灯させることによって、24 時制の時刻を表示するというものだった。

だが、完成して実際に動作をさせてみると、思ったより安定度が悪く、次第に時刻が進んでしまう傾向 (欠点?) があった。パルス性のノイズを拾うことが時刻の進む原因になるのかと考え、AC ライン (AC100V の電源部) にノイズ除去のフィルターを入れたり、元クロックを精度の高い水晶発振にするなど、安定性を高める工夫をした。

この時計は子供が小学校に入学したことを記念して作ってやったものであるが、バラで集めたパ

ーツをもとに、外観のデザインだけでなく、回路設計やプリント基板のパターンの製作（デザインとエッチング処理）からケースの工作まですべて自作したもので、その工作については我ながらよくできたものだと満足している。

#### ・エレキー（エレクトロニック キイヤー）の製作

CQ誌に載っていたICを用いた機器の製作シリーズのひとつで、タイマーICを組み合わせて短点と長点の割合が1対3となるようにリレーを動作させる回路があった。これをベースにしてトーン発生回路や低周波アンプを組み込み、モールのトーンをモニターしながら信号を送出できるエレキーを自作した。

ケースにオーディオのプリアンプの中古品を使ったため、傷とさびが出ていて見た目が悪いことと、動作中のリレー音が「カシャカシャ」と少々うるさいところが難点だったが、RFの回り込みによる誤作動もなく、使い勝手のよい装置だった。（でも実際のQSOにはあまり使っていない）

#### ・各種の定電圧電源装置の製作

5Vから20Vくらいの範囲で動作する小型機器の電源として、定電圧電源装置の回路をあり合わせの中古部品を使って設計し組み立てた。小さなものは数100mAのデジタル時計の電源や、こども用のエンドレスステレオの電源など、大きなものでは直江津工業高校の電気科の生徒が、実習で作ったという手巻きのパワートランスを使って、5V～30Vまで可変できる保護回路付きの電源装置(10A)も作った。大容量の電源装置は割合コンパクトに作れたので持ち運びに都合がよく、理科の授業でアーク放電の演示などに使用したりした。当時は直流で10Aも取れる電源装置はなかったので、電気分解の実験などでは大変便利だった。

#### ・ゲーム用早押しスイッチの製作

中学校の文化祭でのアトラクションで、TV番組をまねた「早押しクイズ」をすることになり、主催者からそれに用いるための早押しスイッチの製作を頼まれたことがあった。本物の機械や装置は見たことがなく、回路図もなかったので、自分で設計するしかなかった。TV番組で見た動きから回路を推察し、答えの分かった解答者が、一斉にスイッチを押す中で、一番早く押した者のランプだけが点灯し、周りの者にそれが分かるように表示する、という動作をする電子スイッチを試作した。

材料は、廃棄された火災報知器の受信機の基盤からはずした中古のリレーと半導体（ダイオード）、市販品の押しボタンスイッチ、40wほどの電球とソケット、ビニール電線（100mほど）など、ほとんど有り合わせのものばかりだった。

動作原理はいとも簡単で、一番早く入力があったリレーが他のリレーを遮断して動作を止め、同時に電球を点灯させるという、至ってシンプルなものであった。TVで使われている本物のスイッチはもっと複雑で精巧なものであるかと思われたが、私の作ったこのスイッチは、ほとんど同時と思えるような100分の1秒くらいの時間差でも正確に動作した。

#### ・救急車に似せた「ピーポー」サイレンの製作

雑誌の記事にフリップフロップという発振回路の応用の特集記事があった。フリップフロップ回路は、時計が「秒」を刻むように規則正しくON・OFF信号を発生させる電子回路である。これをヒントにして、廃棄されたトランジスタラジオからはずした部品を使ってダーリントン接続の

回路をつくり、リレーを動作させて回路を切り替える装置を作った。そして同じラジオのオーディオ部の部品で2種類の発振回路を作り、それを組み合わせて「ピー」と「ポー」の音が交互に出るようにした。さらにオーディオ部のコンデンサの容量を変えながら音調や音質を調整し、最終的には救急車のサイレンそっくりに音を似せることに成功した。

この装置を遊ばせておくにはもったいないというので、自分の車の後部に取り付け、バックギヤと連動させてバックブザーとして使ったりした。音を本物のピーポーに似せすぎたためか、車をバックさせるたびに通行人が振り返ったりして、あまりにも周りから注目されるのでやめた。

#### ・マイクコントローラーの製作

無線機が何台かあってもOP（オペレータ）がひとりだったら、いくつもの無線機を同時に送信することはない。マイクは一本あればいいことになる。だったら一本のマイクで何台ものトランシーバーをコントロールできるようにすれば、いくつものマイクを無線機につなぐ必要もなく、机上はすっきりする。そういう発想から4台のマイクをコントロールする装置を作った。

小型のアルミケースにマイクコネクタを付け、ロータリースイッチで4つのマイク回路を切り替えられるようにしたものである。遊び気分として、当時流行った「スタンバイピー」や、音声にエコーをかける回路（装置）などを組み込んだりした。

この装置は実際に送信機につなぐと、高周波の回りこみ（MICI?）が起きたりしてトラブルが多かった。遊び感覚で作っただけであまり実用にならなかった。

#### ・1200 MHzオールモードアップバーターの製作

当時、1200 MHz（1.2 GHz）の送受信機は、まったく市販されていないわけではなかったが、この域に首をつっこむ者が少なく、関係機器は特注になるため高価だったこともあり、糸魚川ではこの周波数帯にOn Airする無線局は少なかった。だが、周波数が高いとアンテナが小型になり、特殊な形をしたビームアンテナの実験ができること、工作するにはちょうど手頃な大きさになるということなどもあって、この高い周波数に興味を持ったものだけが、機器の自作を試みていたという段階のようだった。



マキ電機というメーカーから144 MHz帯の無線機を親機として、1200 MHzの電波が発射出来るという自作パーツが、発売されていた。私もこのキットを使ったアップバーター（TS-700を親機として1.2 GHzの電波を発射する装置）の製作を試みた。



この機器はキャビティと呼ばれる金属ケースに部品を組み込んで行き、それらのブロックを接続して完成させるというスタイルのキットだった。受信部は割合簡単ですぐに完成し、ローカル局の受信にも成功した。だが、送信部は残念ながら未完成のままとなっている。

自分の判断では、およそ200 mWていどの電波が出ているであろうと思っているが、リニアアンプの工作は、まったく止まったままで現在に至っている。

このとき、これにあわせて 15 ターンほどのヘリカルビームや、20 エレのループ八木アンテナなども試作した。ループ八木は、廃材置き場にあった中古のアルミパイプとアルミ板を工作して製作した。給電部も簡単なガンママッチだったが、実用上問題なく働いてくれた。ヘリカルビームのほうは外観も格好よく出来上がっているが、給電部の Q マッチ部の製作がまだで、その完成待ちである。(とは言ふものの、制作意欲はかなり衰え、完成のめどは立っていない)

#### ・テレビ送信機とリニアアンプの製作

HF 帯用の SSTV などの画像を送受する無線機は、かなり前から既製品として販売されていた。だが、値段がすごく高いものばかりで、“無銭家”を自認する我々のようなアマチュア局には、到底手の届くものではなかった。

だが、手持ちの無線機の UHF 帯の電波に、TV 放送のように映像を載せて (AM 変調をかけて) やれば、自作機でも画像は送信できるのではないかと考えた。微弱な電波なら局免許もいらぬことだし、雑誌の記事などを頼りに見よう見まねでやってみることにした。

このとき考えた TV 送信機の構成は、144 MHz 帯の無線機の搬送波 (AM 波) を、バラクタで 3 週倍して 430 MHz に持ち上げ、それに映像信号の変調をかけるという、至ってアマチュア的な発想だった。そして 430 MHz のリニアアンプを作り、それで 1 ~ 2w 位までパワーをアップさせれば何とか実用になるだろう、うまくいけば数 km くらいなら届くのではないかと、至って大雑把で単純な考えだった。

こうして作りあげた試作品は、机の上に広げたバラックセットだったせいもあって、多くのスプラッタ (漏れ電波) が出ていたようだった。シャック (無線室内) に置かれた何台もの無線機が電波を拾って反応するのでわかった。ともかく弱いながらも TV の映像を乗せた電波は出ているらしいことは確認できた。

映像を受ける方の受信 (像) 機は UHF TV (およそ 700 MHz 帯) の外付けコンバータを改造して 430 MHz 帯の電波を受信することにした。周波数を調整するといっても、満足な測定器を持っていないわけでもないの、コイルの形を変えて Q を変えたり、巻き数を増減させたり、コンデンサを付けたりはずしたりしての、超アマチュア的な Cut & Try で受信周波数を下げていくやり方だったので、なかなか思うとおりに周波数が下がってくれなかったことを覚えている。



## ○2 級アマ取得への挑戦

音声やモールスだけでなく、映像での交信は私にとっては魅力のひとつだった。だが、当時はアマチュアテレビを運用する局はまだ数が少なく、送信機も特注品となるせいか超高価なものばかりだった。おまけに局免許の条件の一つに、従事者免許資格は 2 級アマ以上とされており、すぐに飛びつけるものではなかったのである。

TV 電波を発射できる免許 (電波形式 A9) は持っていないけれども、微弱な電波なら問題はないだろう、と言う自分勝手な判断から、回路集などを参考に、いたずら的な感覚で TV 送信機を作ったこ

とがあった。机の上に広げた試作のセットから、微弱ながら TV 電波がでていることを確認したときは、「よ～し！ 正式に免許を取って TV の運用をやってみようか」という意欲が湧いたものだった。

そしてその目標達成への第一歩は、2 級アマのライセンスを取得することへのチャレンジだった。

当時、2 級アマは国際電波法規、無線工学、電気通信術の 3 科目の国試を受験し、それぞれ 80 点以上の点数を取らなければならないと言われていた。

だが、国試受験だからといって、特別に力を入れて受験勉強をしたという記憶はない。無線工学に自信をもっていたせいであろうか、本当に気軽な受験意識だった。電気通信術のモールス符号（英文）は SWL 時代にすでに覚えていた。したがって、特に新しく覚えなければならない符号などはなく、課題といえば 1 分間 45 文字以上の送受信ができるように、そのスピードに慣れることだった。これには練習用の縦ぶれ電鍵を自作したり、中古の電鍵を買ってきたりして、それを使って送信術の練習をした。受信術のほうは、本物の通信を受信してそれを筆記するという練習を繰り返した。

少し心細かったのは電波法規だった。もともと法律を覚えるのは得意ではなかったもので、これには市販されている問題集を買って、過去に出題された問題と答えを丸暗記することにした。

国試は金沢市にある北陸電波管理局で受験をした。糸魚川からは長野市の信越電波管理局へ向くより、金沢市の方が交通の便などがよく、日帰り受験が可能だったのである。（上級の試験を受けるときは受験地の指定がなく、自分の好きな受験地（電波管理局）を選んで受けることができた）

本番では、無線工学と電気通信術は完璧の出来だったように思っている。しかし、国際電波法規（5 問出題）の試験では、見たことも聞いたこともない（問題集に載っていなかった）問題が 1 問出題されていた。これが答えられないと合格点に達しないことになるので、必死になって自分の知る言葉で回答を作文し、論文形式の解答欄を埋めた覚えがある。

この努力（？）が功を奏してか、結果としてめでたく合格通知が届いた。後日、国際電波法規の試験に出題されていた問題を調べたところ、1 級アマの問題集に載っていた問題とまったく同じだったことがわかった。

もう一つ、電気通信術を受験して感じたこと（印象的だったこと）を記しておこう。電気通信術などといかめしい名前がついているが、中味は 1 分間に 45 文字のモールス符号の送受信の技能を判定する試験なのである。送信と受信の技能試験は、それぞれが別室で行われた。

受信術の試験は広い体育館（講堂）のような試験場で、受験者全員（およそ 200 名くらいだと思う）が一堂に着席し、スピーカーで放送される英文のモールス信号を聞き、その電文を答案用紙に筆記する、というものだった。

少しざわざわした雰囲気の中でスピーカーなどの音量テストが行われた。そのスピーカー音は異様に大きく、まわりの壁に反射してエコーがかかって聞こえるような気がした。私は「バカに大きい音だなあ」と思いながら慢然とそれを聞いていた。そしてこれから本番が始まる旨のアナウンスがあると、一転して試験場は急に静かになった。その静寂はこれまで経験したことのない、と言っても大げさではないと思えるほどの静けさで、先ほどのやかましいスピーカー音との格差がより大きく感じられ、受験者の緊張が高まったことを感じた。そして本文が放送された。

「ピー ピピピピッ ピッ……」 大音量のモールスの信号音がスピーカーから流れた、と思ったとたんに、それに重ねるように「ゴゴゴゴ……」という、地響きのような音が響いた。これには驚かされた。一瞬何が起きたのかパニックになり、それまでの“集中”が途切れそうになった。

それは受験者が一斉に鉛筆を走らせる筆記音だった。紙の上を走る鉛筆のサラサラ音とはかけ

離れた、足踏みかカミナリのようなすごい音だった。おそらく多くの受験者がすごい緊張のため、鉛筆を持った手に力が入り、鉛筆の先が机を突く（叩く）勢いで筆記となったものであろう。ともかくその地響きのような音は、一度は経験してみる価値があるかもしれない。（この経験は私にとっては初めてだったのでびっくりした）

あとになって思ったのだが、このとき鉛筆の芯を折ったりした者はいなかっただろうか。もし、いたとしたら、そのときの当人は焦っただろうなあ。（これは笑い事ではすまされないと思う。当人にとっては当落（合否）にかかわる重大な出来事になるであろう、と思うからである）

大音量のモールス信号と、これまた大音響の筆記音の中で1分少々の聴き取り試験が行われたのだが、このとき試験場に用意された大音量のスピーカーの意味が、分かったというより分からされたといった印象の試験だった。

そしてもう一つ。送信終了の符号が流れると、今度は試験官の声で「全員立ちなさい！」と放送があった。その指示で全員が（私も）素直に立ったのだが、いざ立ってみると鉛筆を持っていても書けない（書き直しや手直しができない）ことが分かった。一般に使われている終了時の「鉛筆を置きなさい！」の指示より有効な方法だと感心させられたものだった。

送信術のほうは小部屋で受験者と試験官とが1対1で対面して行う実技試験だった。受験者は着席した後、備えつけの電鍵（縦ぶれ用）を調整したあと、受験番号を打電（これは採点対象外）してから本文を送信するというものだった。このとき、私は少し余裕があったので、電鍵調整をしながら「VVV DE JAØGUX」と打ったら、真面目そうな中年の試験官は「にやり」と表情を崩していた。本番は試験官から渡された電文（英文）原稿を見ながら、規定以上の速さ（毎分45文字以上）で打電するものだった。試験官はただ黙って受験者の打つ信号をヘッドホンで聞いたり、印字機の打点マークを見て規定どおりの符号になっているかの判定をしているようだった。廊下で順番を待つ間、漏れて聞こえてくる符号が、「訂正符号」ばかりだったり、間違えたのか途中で電文の送信を打ち切り、最初から打ち直しをしているものがあったりして、受験生の緊張ぶりが手に取るように分かったものだった。

### ○3el Tri Bander と Over Sea's QSO + 今だから言える 100w 開局の「裏ばなし」

昭和51年11月、2アマの免許が届いた。かねてから準備を進めていたアマチュアTVの送信機は、リニアアンプの製作だけとなり、それもほとんど完成という状態になっていた。しかし、残念ながら順調に見えた製作工程は、ここで大きな壁に突き当たってしまったのだった。自作したリニアアンプはうまく動作してくれなかったのである。

ストリップライン方式のリニアアンプは、外見的には出来上がっていたと思えた。だが調整がすごく難しかった。参考書を手にも、幾重にもシールド板を立てて慎重に調整をしたのだが、その際に何個ものパワートランジスタを壊してしまったのである。

当時のパワートランジスタはすごく耐久性に乏しいものばかりだった。調整中などにうっかり発振させたりするとすぐに壊れた。壊れたといっても外見的にはまったく形状の変化はなく、壊れる瞬間も音がするわけでもない。本当に一瞬のうちに静かに逝ってしまうのである。しかし値段だけは一人前、いやそれ以上に高く、中には当時の値段で1個数千円もするものもあったりした。

精度の高い優れた調整機器を持っているわけでもなく、簡単な自作の調整装置や測定装置だけで、まったくの勘に頼るような無謀な調整のしかたでは無理だったようだ。こうした失敗を繰り返すうちに、TV送信機への熱も次第に冷めていったようである。



ちょうどその頃、八重洲無線というメーカーから、FT-101という無線機が発売されていた。これ（中古品だったが立派な完働品だった）が、私のシャック（無線室）の一員に加わることになった。

この FT-101 という無線機は、ドライバーとファイナルに真空管が使われている出力 100w の HF 帯のオールバンド機で、今でも名機の中の名機といわれているマシンだった。高性能無線機として発売当初から人気があり、アマチュア局の垂涎のマト的な存在であった。この無線機が私のところに来たときは、筐体にさびが出たりして、いかにも「中古品でございます」と言わんばかりの顔つきだったが、メーカーに再調整をしてもらったところ、すごく調子良く働いてくれた。



さらに FT-101 のあとを追うように 3el Tri Bander（アンテナ）のラジエータ（輻射器）もやってきた。これを機に HF 帯の 100w 局の免許申請をしたところ、思ったより早く審査が進み、早々と仮免許が下りた。（開局の落成検査に来た検査官の話によると、私が HF の 10w の局免許を持っていたので審査が早かったのだそうだ。本当かな？ 何となく頼りなさそうな検査官だったが…）

したがって、100w の本免許が下りるのは 3 月ころと聞いていたが、実際の On Air はそれより早くできることになった。

落成検査には事務系と技術系の 2 名の検査官（男）が、直々に自宅の無線室へ検査に来た。この二人の検査官は、かたくるしい感じがまったくなく、官公庁かあるいは商業無線局の検査のついでにアマチュア無線局の検査に立ち寄った、といった感じだった。検査も家庭的なムードで進められ、かなり事務的で簡単に終わったように感じた。

検査は主として設備の面のチェックで、Hi Power 局であることを踏まえた TVI 対策がきちんととられているか、28 MHz 帯では Power を抑える回路が組み込まれているか、などだった。

実はこの FT-101 は、28 MHz 帯にも 100w の Power が出せる無線機だった。（電波法の規定では 28 MHz 帯は 50w までしか許可にならない）そのため 28 MHz 帯では、終段の真空管のグリッド電圧を下げて Power を抑えるようにする必要があったのである。免許申請のときの条件として落成検査までに、この FT-101 にそういう出力抑制回路を組み込むことになっていたのだ。だが、電圧を変化させる切り替えスイッチや抵抗類などのパーツは取り付けただけで、あとは怠けていて十分な調整と動作確認はしてなかったのである。

案の定、検査では出力抑制回路の装着の有無を聞かれた。私は内心で「これはまずいな」と思ったが、「はい」といって FT-101 の背面の切り換えスイッチを見せた。すると、検査官はそのスイッチを指でパチパチさせて動きを確かめていたが、それ以上の質問をしなかった。

次に 10 MHz 帯の JJY（日本標準電波＝正確な周波数と時刻を放送している無線局）を受信して周波数と時刻の校正をするようにとの指示があった。だが、いくら手順どおりに FT-101 を操作しても JJY の信号を受信できなかった。私は「今日は空中状態が悪いせいか JJY が受信できません」と答えたら、この検査も OK ということになった。後で考えてみて思ったのだが、実はこのときの FT-101 には、（入手したときから）10 MHz 帯受信用の水晶（クリスタル）が装着されていなかったのではないだろうか、と思った。（どうも内臓の水晶ソケットが一つ空いていたような気がする）

一番時間がかかったのは、TVI 対策についてだった。近隣での TVI の有無について事前にアンケート調査をした結果を提出してあったのだが、その中に疑わしい記載があったことに触れて、そ

の様子を確認するという検査だった。TVIがあるかどうかを実際確認するために、一人の検査官が隣の家まで出向いて行った。そして残ったもう一人の検査官の指示でフルパワー（100w）での送信テストをやったのである。“VVV DE JAØGUX”をCWで送信するテスト電波でチェックしたのだが、結果は良好で問題はなかった。

だが、劣化で画面が黄色くなった隣家のカラーTVを見てきた検査官は、「あの家のTVならTVIが起きない方が不思議だ」と小声で話していた。隣家のカラーTVは、よほどひどいTVだったのであろう。（この頃のブラウン管式のTVは、古くなると画面が黄色くなるものが多かったのだ）

この検査では従事者免許や電波法令集などの関係書類はほとんど見なかった。雑談をしながら時間を過ごしているといった感じで、時間が来たらあとは検査簿に検査官の名前を記入して終わりというあっさりしたものだった。

こうしてJAØGUXは無線局としての検査に合格し、1977年（昭和52年）2月から本格的なDX QSOにハマっていくことになったのである。

とりわけこの1970～80年代（昭和45～55年代）は、太陽活動が活発だったせい、電波伝播のコンディションがすごく良いときであった。14MHzや21MHzのCWで「CQ DX」を打つとヨーロッパ（UA, YO, HA, OK, SP, DMなどの主として東欧の局）から盛んに呼ばれたものであった。魚釣りのたとえでいうと“入れ食い”の状態でヨーロッパや南米とQSOができた。そして、交信相手局のQSLばかりでなく、海外のSWL局からのレポートも頻りに送られて来たものだった。



100w局申請で主役になったこのFT-101は、終段（ファイナル）にテレビの垂直同期増幅用の真空管2本を用いた無線機でPowerがあった。CWモードにはフィルターが装着されていて、そのサイドの切れがすばらしく、混信に悩むこともほとんどなかった。（たまにスプリットで呼ばれて気づかないときがあったりしたくらいだった）

また、車載での運用ができるように、12Vの電源を真空管用の電源に変換できるようにDC-DCコンバータが組み込まれていた。（でも使ったことはない）真空管使用の無線機だったせい、コンパクトな筐体の中にAC用のすごく大きな電源トランスが納まっていた。そのせいかものすごく重かった。（20kgくらいはあったかと思う）特に計測したことはなかったが、送信Powerもそれなりに出ていたようだった。

アンテナも中古の、それも3el Yagiのラジエータ部分の1本だけだったのだが、ロータリーダイポールとしてよく働いてくれた。しかしこのANTは2年目の冬に雪で折れ曲がってしまった。

当時のアンテナメーカーで「旭精鋼産業（ASAHI ANTENNA）」という会社があった。この会社からAS-33という3el Tri Banderのアンテナが発売されていた。これは当時大好評のアンテナで、電気的特性だけでなく、ボルトやナットにステンレスを採用するなど、作りもしっかりしていた。（当時はアマチュア局用製品にはステンレス製のボルトやナット等はまだ商品化されていなかった）最も我々の気を引いたのは、アンテナの本体や部品が壊れても6年6ヶ月の間保障するといううたい文句で、そう言わせるほどの会社の自信作でもあったようだ。もちろん値段も高かった。

(あまりにも壊れないため、補修部品が売れず、営業不振になったといううわさを聞いたりした)ともかくこの AS-33 というアンテナは DXer 間では垂涎の的になっていた。

このアンテナは喉から手が出るほど欲しかったが、値段が高くて私にはとても買える物ではなかった。そのような時、「ナガラ電子工業」という会社、がアメリカの MOSLEY (モズレー) という会社の 3el Tri Bander を、日本で生産し発売していることを知りそれを買うことにした。このアンテナは AS-33 に比べてエレメントも細く、やや貧弱に見えたが値段は安かった。そのアンテナの名前は TA-33 Jr といい、電気性能的には AS-33 に劣ってはいないというふれこみだった。このアンテナの長持ちさせる方法はステンレスのパーツとともに「テナーコート」というペイントをエレメントに施し、アンテナの腐食を抑える方法だった。これは効果があったようである。(その証拠に 20 年以上も経った今でも、この TA-33 Jr は健在で活躍している)

Over Sea QSO の魅力は、何といても DX (遠距離の) 局との交信や、珍しいカントリー・地域の局との交信であろう。そしてコンタクトした局の QSL カードを手に入れることであろう。

世界の 6 大陸 (アジア、ヨーロッパ、アフリカ、南・北アメリカ、オセアニアの 6 つ) のアマチュア局と交信し、QSL カードを取得 (コンファーム) すると「WAC」

(Worked All Continent) というアワードを得ることが出来る。私はこのアワードを得るだけでもアマチュア局の勲章になると思っている。これに南極大陸が加わり、7 大陸のコンファームとなるとさらに難度が上がって難しくなる。だから無線活動 (とりわけ海外向けの DX QSO) をやった証しとして、ぜひこのアワードは獲得してみたいと思ったものだった。

さらに、DXCC という“賞”があつて、世界の 100 以上のカントリー・地域の無線局と交信し、コンファームを完成させると、一人前の DXer として認められるという。だからそれを目指して Over Sea の局との QSO を追い求めるアマチュア局も多いという。



短波帯 (HF 帯) の電波 (信号) を聞いていると、“フェージング” といつて信号が周期的に強弱を繰り返して聞こえることがある。電波が地表と電離層との間で反射を繰り返しながら伝わってくるときに、互いに干渉しあつて唸りのような強弱が生じるためといわれているが、地球の裏側からフェージング (QSB とも言う) やエコーを伴いながら届いてくる微弱なモールスの信号を聞いていると、何か郷愁を帯びた感じで、感慨深いものを感じさせられるときもある。

また、世界中から聞こえてくるこのモールスの信号を聞いていると、その国の電力事情が推察できることもある。モールスの信号は通常は長点が「ピーッ」、短点が「ピッ」と、トーンが一定で歯切れよく聞こえるものだが、ある特定の地域の局の信号のトーンが、「ピョーウ」とか「ピョ」と尻上りになったり (逆に尻下がりにになったり) して聞こえることがある。これは無線機が必要とする電力が足りないため、高出力で電波が発射されると供給電圧が下がり、そのために周波数が変化しているのではないかと考えられるのである。おそらくこの無線局のある地域 (カントリー) は、日常的に電力が不足しているのであろう。もしその地域が夜だったりすると、オペレーターが無線機のキーをたたくたびに電圧が下がるなどの変化をきたし、部屋の電灯の明るさが信号に合わせて変化しているのではないだろうか、と想像してしまうのである。

## ○コンテストの参加とアワードハント

“無線”で「コンテストをする」という言葉を聞くと、「無線でどんな競争するんだろう？」と思う人も多いと思う。アマチュア無線で言う「コンテスト」には、機器の製作やカードのデザインなどの出来具合を競うもののほか、運用（QSO）に関するものとして、決められた時間内に多くの無線局と交信し、その交信局数を競うものがある。これ（後者の場合）には交信の早さや正確さなどの技能が求められることが多い

私が初めて参加した QSO コンテストは、昭和 45 年の JARL 主催の「6m & down contest」だった。根知の谷の中からの On Air だった。これは 50 MHz より高い周波数帯での QSO コンテストで、当時の LOG（業務日誌）を見ると、このコンテストでコンタクトできた局数は 2 日間で 144 MHz 帯のわずか 10 局だった。だが今思うには、当時は VHF 帯でのコンテストの参加局数は今より少なく、あまり活発ではなかったという印象が強いのである。そのような状況の中で、10 局も稼いだということは快挙ともいえるのではないかと思いたい。我ながら良くがんばったものだと思う。なぜなら、VUHF のロケーションにおいては最悪ともいえる、あの根知の谷の中の Home（常置場所）から、TR-7100 と GP アンテナだけでコンテスト局を 10 局も Hunt したのだ。この頃はまだ“はさ木”アンテナを上げていなかったときのことである。「自分を褒めてやりたい」といっても言い過ぎではないと思う。

その後も信越支部主催の JA0 VHF コンテストや OSO コンテスト、北陸支部の JA9VHF コンテストなどには積極的に参加した。このほかにも JARL 主催の ALL JA、ALL city、全市全郡、XPO 記念など、多くの国内コンテストに参加したが、ほとんどが HF 帯での参加だった。

また、Over Sea（海外局が参加）のコンテストでは、JARL が主催する All Asian Contest があった。これにもたびたび参加した。これにはもっぱら CW で参加した。それは自分の CW の通信術が何処まで通用するかを試したかったことと、DX（遠距離）やパイルアップになっている局との交信は、Power が少なくても遠くまで届く CW の方が有利だと思ったからである。

海外局相手のコンテストは 14 MHz や 21 MHz での参加が多かったが、ARRL（USA アマチュア無線連盟）の DX Compe というコンテストに 7 MHz の CW で参加したときがあった。このときは W（北アメリカ）方面のコンディションがものすごく良く開けたときだった。No QRM（混信なし）の状態で、一気に 30 数局と交信でき、快い充実感と達成感を感じたものだった。

国内のコンテストでは、毎年正月に行われる New Year Party というイベントがある。私はこのイベントには 1979 年（昭和 54 年）から毎年（毎回）参加し、途切れることなく現在も続けている。

この New Year Party には歴史があって、最初の頃は「New Year Contest」という競技形式で、短い時間に数多く交信しその点数を競うような内容であったという。パワーとテクニックに劣る我々のような駆け出しのアマチュア局には、大変参加しにくいコンテストだったように覚えている。

それが改善され今のように RS(T)+QRA(名前)の“あいさつ交換”へと変わった。これによりすごく参加しやすいイベントになったと思っている。

さらにこの New Year Party は、現在では 2 日間（36 時間）にわたって行われているが、初めの頃は 1 日（正確に言うと 9:00～21:00 の 12 時間）しか開催されなかった時代があった。参加しや



すいといいながらもクリヤするには運用時間確保が大変な Party だったのである。

このイベントは、正月の2日と3日の2日間（36時間）に20局とのQSOを完成させ、JARLに報告してその年のステッカーを得る。それを12回（12年間）かけて12枚のステッカーを集め、十二支の干支シリーズを完成させるものである。ともかく、一巡するには12年もかかるという、気の長いイベントなのである。途中で休むと次の干支まで12年間待たなければならなくなるから、休まないように毎年参加することが肝要となる。たった20局といえどもかなり難しい条件で、ロケーションの悪いところだったり、年始まわりなどで外出しなければならなくなったときや、家人に用を頼まれたときなどは時間内に20局のクリヤができるか焦りを感じたものだった。だが今のようルールが改定（開催時間が延長）されてからは、われわれのような poor な無線局でも参加しやすくなった。これはありがたいと思った。できる限り（閉局するまで）参加し続けたいと思っている。

JARL や各県支部の発行するアワード（賞）の獲得にも熱中した。JARL が発行しているものでは、AJD（全国10地域のアマチュア局のQSLを得る）や、WAJA（全国の都道府県のアマチュア局のQSLを得る）をはじめ、V・UHF-JCC（Japan Country City=国内の市のアマチュア局のQSLを得る）などのアワードの獲得に取り組んだりした。

海外の無線連盟が発行しているアワードでは、ARRL（アメリカの無線連盟）が発行している WAC（Worked All Continent=アジア・アフリカ・南北アメリカ・ヨーロッパ・オーストラリア・南極の全7大陸に存在するアマチュア局のQSLを得る）というアワードがあった。

このアワードを獲得することが難しいのは、アフリカ地域や南極大陸の局とのQSO（交信）であろうと思えた。日本から見ると地球の裏側にあたるせいもあって非常に遠いこと、それに加えて、その地域に存在するアマチュア局が少ないことなどである。よほど丹念にワッチしていないとコンタクトできないのである。それに加え、たまにししか聞こえない珍しいDX局だったりすると、全世界から一斉に声がかかり、ひと切れの肉に多数の犬が群がって大騒ぎになっているような状態になってしまうのである。（これをドッグパイル=dog pile という）



こうなってしまうと私たちのような poor な無線局は、なかなかコンタクトしてもらえなくなってしまうので、待つか諦めるかということになる。がんばって待っているうちにコンディションが変わり、珍局は聞こえなくなってしまうたりする。だからいち早く見つけ、すばやくQSOを終わらせることが大切になってくるのである。

このアワードには周波数などの制限はない。だが、獲得のためには全世界に届く電波の周波数帯で運用できるようにすることや、グローバルな感覚と技術を駆使した通信技術を修得することなど、無線活動の中でもかなり高い難度を持つ価値のある賞であろう、と私は思っている。

このアワードの獲得を意識してからは、私はかなり真剣にワッチをした。そのせいもあって局数の多いアジアやヨーロッパ、北アメリカなどの局とは割合簡単にコンタクトできたし、QSLの獲得も割合容易だった。だが、南極大陸は局数が少ないうえ、運用している無線局のほとんどが観測基地の業務用の無線局であったりして、アマチュア局の On Air は機会が少ないであろうと思われた。

事実、丹念にワッチしたつもりだったがコンタクトは6大陸どまりで、なかなか7大陸目のコン

タクトはできなかった。

## ○QSLカードについて

アマチュア無線では、交信した相手無線局（特に初交信の局）と、交信後に QSLカード を交換するという習慣がある。このことは、礼節を重んじる人には当たり前のことで、初対面の人とのあいさつに添えて名刺を交換することと同じ感覚でとらえている人も多いと思う。しかし、私はこのQSLカードの交換はそれ以上に大きな意味があると思っている。それは無線（電波）という目に見えない“道具”でQSO（コンタクト＝交信）したことを証明する唯一の“形のある証拠品”だからである。

一般にQSLカードは絵葉書のようなカードで作られているものが多い。カードのデザインなどは自由である。したがって各局は、自己存在をアピールしたオリジナル性豊かな楽しいものを作って発行している。特にコールサイン（呼び出し符号）は世界に一つしかなく、自分（無線局）の存在を表す“象徴”でもあるから、特に目立つようにデザインしたりしている。

そしてそのカードには、自局のコールサイン、交信した日時、周波数帯、電波形式、了解度、信号強度、使用した無線機やアンテナの構成など、無線交信に係る諸要素のほか、簡単なメッセージ（コメント）などを記載し、自分の肉筆サインなどを入れて交信相手局に送付する。言わば交信の証しとなる「証明書」なのである。

送付する方法も直接郵送や宅配便利用、無線連盟経由などいろいろある。私の場合は、開局当初はQSLカードに切手を貼ってはがき便で送ることが多かった。だが、発行枚数が増えてくると、発送に手間がかかる上に郵送費（切手代）もバカにならなくなってくる。したがって、カードの送付方法を工夫するのだが、送料が安く確実に相手に届くと思われる日本アマチュア無線連盟のカード転送システムを利用するのが最善のようである。（この方法を「JARL経由＝VIA JARL」という。この方法は少々時間はかかるが盗難や紛失の少ない安心して送付できるシステムだと思っている）

時にはしっかりとカード交換の約束をしたにもかかわらず、カードを送ってこない局があったりする。悲しいことだが、それは開発途上国などの海外局ほど多いようである。

海外の珍局とのQSOに成功し、どうしてもカードが欲しいと思ったときは、相手局の住所を調べ、返信封筒とIRC（国際返信切手券）を同封して直接郵送するという方法がある。過去に何度かその方法でカードを送ったときもあった。だが、それでも全くの「なしのつぶて」というときもあった。このようなことは、特定の国や地域に多く見受けられるようだった。おそらく、そこは郵便事情や治安が悪く、郵便物が盗まれたりして、先方に届いていないのかもしれない、と思うことにした。

だが、私はQSLカードは単なる交信の証明書では終わらないと考えている。届いたカードをじっくり観察すると、いろいろなことが読み取れるからである。

初交信の場合の交信内容は、大体自己紹介などで終わることが多い。CWの場合などはいったって形式的に交信が行われるので、符号の短縮や省略も多く、あの「ピーピー音」だけではOP（オペレーター）の年齢や性別はほとんど分からない。だが、受け取ったカードを見るとその無線局長（OP）の人柄や、その他の環境などがなんとなく感じとれることがあるのである。

とりわけ「Remarks欄」のコメントがそうである。非常に短い、ほんの一行にもならないコメントなのだが、これが私にとっては一番人間性を感じさせる「ひとこと」と思い読んでいる。大

概は事務的なあいさつで、「今後ともよろしく」とか「HPE CU AGN」（またお会いましょう）という内容が多いのだが、中には「154649」のような暗号もどきのメッセージもあつたりする。海外からの場合は英文でのものが多いが、W（アメリカ）やWH6（ハワイ）、HM（韓国）からのものには、日本語でのメッセージがあつたりする。

南米の某国から届いたQSLでは、おそらく何かにかかれた日本の文字（漢字）を書き写してメッセージにしたものであろうか、たどたどしく、ミミズが這い回った跡のような線や点の集合体（文字）で、「有難う御座いました」と読めるメッセージが書かれているものもあつた。日本の文字はアルファベットの筆記体のような、いわゆる書きなぐりのような文字とは違い、縦線、横線、はね、はらい、とめなどの、角ばった筆文字で書くため、西洋人にはすごく難しいと思えるのである。そういう努力をしてまでメッセージをくれると思うと、涙が出そうになるほどうれしく思ったものだった。

もう一つ、カードの紙質、印刷インクの質、印刷技術などを見ると、その国や地域の工業力や経済状況、国民の生活状況などを推察できることがある。写真用紙のような非常に紙質の良いカードや、多色のインクでグラビア印刷されたカードなどは、日本では一般的でそれほど珍しくない。しかし、そのような上質のカードに混じって、漂白されていない茶色のボール紙のような紙に、単色のインクで印刷された質素なカードが届いたりしたこともある。紙質から生活の程度が読み取れるような気がした。また、規格カードであろうか、カードのデザインがどの局も全く同じという国もあつた。よほど無線に関する統制の強い国か地域なのであろうと思われた。

## ○「笑い話」にもならないバカバカしい話2題

シャック（無線室）で書き物や工作などの仕事などをしながら無線をワッチしていると、いろいろな出来事やハプニング情報が聞こえることがある。受け止め方もいろいろあるが、中には人間性が疑われるような出来事もあつたりする。

電波法で言う「通信の秘密」の漏洩規定に抵触しない範囲で、「出来事」を紹介しよう。賢者である読者の皆さんには、釈迦に説法のような話だが、笑えない笑い話と受けとめてもらいたい。

### （第1話）

2m(144 MHz)のメインチャンネルで、北陸自動車道の糸魚川ICでR148に降りたモービル局（JA1エリアのコール局だった）が、長野県の大町方面への案内と誘導を求めてCQを出していた。

地元の若いコール局の局がこれに応答し、サブチャンネルを指定するようにと行ってスクバイした。だが、このモービル局はサブチャンネルへ移る様子を見せず、メインチャンネルのままで長々と自己紹介と自慢話を始めたのである。

その内容は、自分は那須塩原から来た。那須高原は観光地なので東京方面からのモービルがたくさん来て、道案内や誘導を要請してくる。自分は積極的に応じてやっている。だから自分は誘導には慣れている。そして誘導がうまいといって皆さんから喜ばれている。というものだったが、これを5分間くらいにわたって一方的に話し続けたのである。

間延びした頃にマイクを返された若い局は、痺れを切らした様子で手短かに「現在位置はどこですか？何か見えるものはありますか？」と聞いた。モービル局は「海と山が見える」とだけ答え、現在位置が分かる具体的な説明がなかった。そして、さきほどの自慢話の続きを、再び長々と話し始めたのである。

どうやら8号線がパスを東に向かっているらしいことが分かった。若い局はもとに戻るように

と誘導しようとした。だが8号線バイパスには中央分離帯があってUターンはできない。結局モバイル局は(数km先の)大和川か梶屋敷近くまで行ってUターンしたようだった。

10分近くかかってやっと現在位置が分かり、“一本道の迷子”からの脱出に成功したのだが、この間このモバイル局は自分の自慢話ばかりで、誘導してもらうための現在位置や進行方向などの情報を全然言わなかったのである。(那須塩原はHome QTHで、自分は誘導のベテランだと言うことは何度も言っていたけれど……)

それでも若い局はがんばり、このモバイル局を8号線のバイパスから148号線へと誘導し、大町方向へのルートを説明してQSOを終わろうとした。

ところが、このモバイル局は何を思ったのか、急に言葉を荒立て、自分を誘導してくれた若い局をなじり始めたのである。「あんたは誘導が下手だ。自分は迷子になりそうになった」と……。誘導した若い局はあつけにとられたようすで、返す言葉がなかったのか黙ってしまった。

このとき、この交信の一部始終を聞いていたと思える地元のOM局が、太いドスの効いた声でこのモバイル局をどなりつけたのである。

「あんたこそ何言ってんだ！ 誘導を頼んでおいて、それが心配してもらった者のという言葉か！ まずは礼を言うのが先だろう！」この剣幕には威勢の良かったモバイル局も沈黙してしまった。

この出来事はメインチャンネルでの長話しただけに、かなりの局が聞いていたと思われた。ワッチしていたと思えるほかの地元局から、苦勞した若い局へ、ねぎらいの声が聞こえていた。

それにしても、糸魚川ICで降りて148号線に出たとき、自分が海へ向かっているか、山へ向かっているか(北向けか南向けか単純な一本道なのに)このモバイル局は分からなかったものだろうか。カーナビが普及してなかった時代とは言え、自称誘導のベテランとしては少々お粗末なものを感じた。

## (第2話)

これも2m(144MHz)のメインチャンネルであったみっともない話である、と言いたい、受け止め方によっては迷惑でもあり、また恐ろしい話でもある。

この日は天気の良い休日だったように覚えている。2mのバンドは8号線を走るモバイルのCQなどが聞こえ、割合にぎやかな状態だった。

お昼頃にあきらかに酔っ払いと思える男の声でのCQが聞こえたが、あまりにも“ろれつ”の回らないたどたどしい声に誰も応答しなかった。コールサインから信越管内の無線局長であることが推察された。姫川港の埠頭へ魚釣りにきている様子だった。おそらく一杯飲みながらの魚釣りで、楽しく「出来上がって」しまったものであろうと思われた。(ここまでの出来事ならばよくあることで特に問題はなかったのだが……)

いくらCQを出しても誰も応答をしてくれないことに腹を立てはじめたこの局長さんは、メインチャンネルでいたずらを始めたのである。

地元(糸魚川)のアマチュア局が応えてくれないことはいやみや悪口を、ボヤキの口調で演説したり、電波を出しっぱなしにして長い時間その周波数が使えないようにしたり、カーステレオの音量を上げて音楽を流したり、無線機のマイクをカラオケのマイクに見立てて、音痴同様の粗末な歌を歌ったりと、地元としては甚だ迷惑ないろいろなことをやってくれたのである。注意をしようとして声をかけたOM局(同行の仲間か地元の局か不明)にも、「馬鹿野郎」「クソ野郎」の返事で、もう手に負える状況ではない様子だった。

どういう人物がこんなことをやっているのかと、野次馬気分で見に行ったらローカル局



もあったという。その野次馬から聞いたと言う者の話によると、この局長さんは本当に泥酔して“ぐでんぐでん”になっており、声の掛けようがない状態だったという。

その泥酔していた局長さんは、夕方（数時間後）には車を運転して帰ったらしいという。だが、あの酔い方では、数時間程度の短い時間で酔いが醒めるとは思えず、酔ったままで148号線のあの山道を運転していったのであろうか。この情報が事実とすればこの話は恐ろしい出来事といって良いような気がする。この局長さんには何か酒以外に飲ませる薬がいるのではないかと思えたりした。

## ○JARLの役員時代（ともかく忙しかった）

「糸魚川クラブ」は、JARL（日本アマチュア無線連盟）の傘下の組織として、信越地方本部（JAØエリア＝事務局：長野市）に属する新潟県支部の地域クラブとして登録されていた。

私が糸魚川クラブに入会したときは、JAØCYK局が会長を務め、そのあとをJAØANJ局が継いでいた。会員は一人一役で何かの係りを受け持ち、家庭的なムードの中で活発な活動が展開されていた。私は入会して間もなく広報担当の係りを受け持つことになった。そして編集長のBNK局にいろいろと教わりながら、広報誌「ヒスイ」の刊行を手伝ったりしていた。「ヒスイ」は手書きのガリ版刷りで、B4のわら半紙1枚でいどの広報誌（月刊報）だった。クラブの催し事やニュースなど、内容も豊富で毎月きちんと定期的に発刊されていた。

この「ヒスイ」が100号を発刊することになったとき、何か「記念となるもの」を作ったらどうかという声が出て、「クラブ沿革史」を編纂することになった。とは言っても予算が潤沢にあるわけでもなく、内容もクラブ結成から現在までのクラブの活動の記録をまとめたもの程度となった。初版はB5判サイズの表裏の表紙を含めて11ページほどの手書きの小冊子だった。何もかも手作りで活動していたことを匂わすこの沿革史は、当時の全クラブ員に配布されたと思うが、今でも保管されている局長さんはいらっしゃるだろうか。

昭和48年、クラブ会長のANJ局が突然JA2エリアへ転居することになり、それまで“名前だけ”の副会長だった私が、会長の仕事を代行することになった。そしてこのあとも続けて（昭和49年度から52年度まで）会長を務めることになった。

私がJARL糸魚川クラブの会長を務めていた時期はいろいろなことがあったことが思い出される。大半はこれまでのクラブ行事等を踏襲する活動だったが、それ以外に新しい行事やイベントなどにチャレンジしたこともあった。

JARLの全国大会（通常総会）が隣県の高岡市で開催され、これにクラブを挙げて参加したことや、FDコンテスト（Field Day Contest）にオールバンドで参加し、8万数千点も獲得したりと、盛り上がったものだった。なかでも心に残る大きなチャレンジ（催事）といえば、昭和51年の夏に糸魚川・西頸城地区で初めてアマチュア無線技師の養成講習会を開催したことであろう。

日本アマチュア無線連盟（JARL=Japan Amateur Radio League）では、会員を増やすことをねらいとして、無線従事者を養成する講習会を推し進めていた。アマチュア無線の無線従事者資格は、電波法上では年齢・学歴や性別などの制限がまったくない。JARLが認める地域クラブなどの団体の開催する講習会を受講し、国家試験に代わる修了試験を受けて合格すれば（そして日本国籍があれば）、老若男女を問わず誰でも電話級（現第4級）アマチュア無線技師の資格が取得できる仕組みになっていた。したがって講習会で学習する内容は、電波に関する法律（電波法全般）や無線工学など、一部にはかなりレベルの高い内容が盛り込まれており、言葉で言うほどやさしいもの

ではなかったのである。当然養成講習会の催行そのものにもかなり厳しい条件があって、質の高い講習会が求められていたものであった。

そういう中で企画から始まって組織作り、催行の申請、PRと受講生の勧誘、会場の確保、講習会の実施と運営、修了試験の実施、そしてJARLへの報告と、クラブのイベントとしては非常に内容の濃い活動だった。この講習会は糸魚川クラブとしては催行が始めてであったにもかかわらず、他の地域クラブ（たとえば豊富な先行経験を持っている上越クラブなど）に応援を要請するまでもなく、糸魚川クラブ員の中から指導者や講師を賄って、自力で講習会を実施することが出来たのである。約3週間という短期講習会だったが、合格率83%という高率で修了することが出来た。クラブとしては大きな成果であったと思っている。また、指導者として先頭に立って協力いただいたJAØCOT、JAØCYK、JAØEUR、JAØLXWほか多くのクラブ員各局に感謝したい。

同年（昭和51年）、県支部役員の上越地区幹事を糸魚川クラブで担当することになった。これは2年後の昭和53年度に県支部大会を糸魚川クラブの主管で開催することになったためであった。年度途中での役員要請だったこともあり、適任者が決まるまでクラブ会長と地区幹事を兼務したりした。

ちょうどタワーが完成し、VHF帯へのOn Airに熱が入り、上級資格（2アマ）の取得にも成功し、Over SeaのDX QSOにのめり込み始めた頃だったこともあって、何をするにも時間が惜しかった。

加えて、学校では視聴覚（ライブラリー実行委員等）の仕事も増えてきており、公私を問わずいろいろな仕事や雑用が入ったりして、家庭や仕事と無線との両立はなかなか大変だった。この頃が一番忙しかった時期であっただろうと思っている。

### ○冬眠期（？）に入る（仕事に追われ思うように無線ができなくなった時期）

昭和58年4月、中越地区への転勤がきまり、栃尾市へ引越すことになった。単身赴任も考えたが、子どもたちにはほかの地区での学校生活を経験させるのも良いのでは、という考えもあって家族を連れて栃尾へ引越した。このとき持っていった無線機は、430MHz帯のハンディ機とモバイル用の144MHz帯車載機だけだった。他の無線機器のほとんどは自宅に残しての引越しだった。

これまでの運用経験から、144MHz帯（2m）での栃尾と糸魚川とのコンタクトは不可能であることは分かっていた。だが三島郡出雲崎町の小木ノ城というところにある、439MHzのレピーターを使って中継すれば、糸魚川～栃尾のコンタクトは可能であることは知っていた。しかし、持っていたRigが1wハンディ機と貧弱だったことに加え、仕事に追われて無線機に火を入れる機会もなく、栃尾ではほとんどOn Airできなかった。

それでも月に1～2回程度、自宅に戻れる機会があった。とはいうものの北陸自動車道がまだ全線開通しておらず、コマ切れのような高速道と、「した道」を何時間もかけて走らなければならなかった。したがって自宅に戻るといっても一家そろっての旅行のような移動だった。この自宅に戻ったときがHomeからOn Airできる最良の機会だったのだが、自宅を留守にしていたことによる雑事の整理などに時間がとられたりした。さらにHF帯のHigh BandではDXのコンディションが下降状態になってきたのか、Over Sea局はあまり入感しなくなっていた。VHF帯のほうも、CQを出してもローカル局からの応答がほとんどなく、「糸魚川の空は少し静かになったのでは？」と感じたものだった。

昭和 61 年の春、自宅から通勤できる糸魚川市内の学校に転勤した。名だたる豪雪地帯で、3 年間にもわたって大雪に見舞われた生活から開放され、自宅に戻っての生活となったのである。ありがたいことに、この留守にした間にも特に傷んだ無線機などもなく、ほとんどの機器はスイッチを入れればすぐに動作をしてくれた。だが、すぐに無線活動を再開というわけにはいかなかった。なぜなら栃尾時代には、糸魚川クラブの会費を未納としていたため、非会員となっていたのである。そのため糸魚川クラブを含めローカル情報はほとんどなく、“浦島太郎”になったようだった。そればかりではなく、自宅を離れていたわずか 3 年間の間に、無線界ばかりではなく、社会（学校）を取り巻くいろいろな事情も変わってきていたのだ。

この頃は全国的に学校が“荒れていた”時期だった。私が勤務した学校もその例にもれることなく荒れていた。怠業、非行、校舎破壊、暴力など、何かにつけて指導に手のかかる生徒が多かった。そのような生徒の対応や指導に追われる日々が続き、アマチュア無線を楽しむという時間的なゆとりは、まったくとっていいほどなくなってしまったのである。

そういう中で、昭和 64 年（と言うより平成元年と言った方がわかりやすい？）糸魚川クラブに再入会させてもらうことになったが、入会するといきなり 2 度目の糸魚川クラブの会長に推された。翌々年に控えた県支部大会が、糸魚川クラブで主管することになっていたそうなのだが、その組織や運営計画がまだ出来ていなかったというのである。したがって、その組織作りや準備、大会に向けての会員の意識を高めることなどを託されての会長就任要請だった。

このとき私は、糸魚川クラブの会員と役員との間に、深い溝（不信感）のようなものがあることを感じていた。クラブ内に以前のような家庭的な、建設的なムードがなく、何かまとまりを感じなくなっていたのである。話し合っただけで決められた事が実行されなかったり、一部の役員・会員のわがままがあったりして、決議機関などで決定されたことと異なる活動が行なわれたりして、組織的な活動の足並みが乱れてしまっていたようだった。

クラブ員たちも何となく冷めた状態のように感じられ、打ち合わせの会を開こうとしても、肝心の係りや担当者が集まらなかったり、係りや担当者でないものが勝手に（独断で）進めようとするなど、活動の足並みがそろわないときがあったりした。それでも誠意を持って努力をしてくれるクラブ員がいたりして、県支部大会の総会の開催には（形式的ではあったが）何とかこぎつけることができた。しかし、大会のアトラクションのイベントなどは、期待したほどムードは高まらなかった。

前回の成功した支部大会をモデルにし、万全の策の県支部大会運営計画だったと思ったのだが、今回はどういうわけかうまくいかなかった。その原因は、私が長い期間糸魚川を離れていたため、クラブ員のコールや名前、顔などが分からなくなり、コミュニケーションが十分に図れなくなっていたせいであろう、との反省を持っている。準備や運営等に一生懸命にがんばってくれたクラブ員各局には大変申し訳なく思っている。だが、「そんなことはない、よくやってくれたほうだ。あのままだったら支部大会は開催できていなかったらう…」という声の一部があったという。

このように感じたのは私だけかもしれないが、言葉では表現しにくい、もやもやとすぶった（スカッとした気分になれない）後味の悪い県支部大会の取組みだった。

その後のクラブの動きについては、新しい会長を中心にクラブ員たちが目的意識を持って集まっており、活動やイベントに取り組む様子は積極的で、安定したまとまりを見せてきている。

JAØGUX の LOG（業務日誌）の交信記録を見ると、無線活動が一番盛り上がったときには年間の交信局数が 1,200 局を超えたときがあった。決して多い数ではないと思うのだが、それでも連日のように 1st QSO のコールサインが並んでいたりしたときもあった。だが、この冬眠期に入っ

てからは 100 局に達することがないほどにまでに **On Air** の回数が減少してきていた。最も少ないときは年間の交信局数が 20 数局と 30 局に達しないときもあった。

この理由は、本職の仕事（というより“雑務”）に追い回され、無線をするヒマがなくなったのである。ともかく落ち着いて無線機の前に座るといふことや、今まで当たり前のように行っていた無線交信（ローカルラグチュー = おしゃべり）などをやっている時間がなくなったのである。**JARL** の主催する各種の催しや **DX** コンテストなどにも、まったく参加できなくなってしまった。しかし何かひとつくらいはコンテスト参加を続けたい、と言う気持ちがあり、**NYP** (**New Year Party**) 的のを絞って参加することにした。ともかくこれには万難を排してがんばることにした。（これは今でも続いており、自分で自分を褒めている＝いわゆる自己満足というヤツである）

「宝探し」と言っ、宝物に見立てた小型の送信機(**TX**)を屋外に隠し、その電波の発信元を探し当てるといふ電波探知ゲームがあった。糸魚川クラブでもこのゲームのために専用の **TX** を自作したりして楽しんだものであった。しかし、ただ隠されたものを探すだけでは面白くなくなり、標的となった者が **TX** から電波を発射しながら動物（きつね=**Fox**) のように逃げ回り、それを受信機(**RX**)を持ったハンターが追いかけて捕まえる、という「**Fox** ハンティング」(狐狩り)というゲームへと進化して行った。

時期は少しさかのぼるが、昭和 52~53 年頃だったと思う。クラブのイベントで、糸魚川市の街中で（雑踏を期待して）**Fox Hunt** を催行したことがあった。**Fox** 役の中学生に、出力が数 10mW くらいの **TX** を持たせ、市内でも一番にぎわっていると思える繁華街の雑踏に“放し”、逃げ回ってもらうというものであった。だが、その日は日曜日であったにもかかわらず、開始してすぐに **Fox** が“御用”となってしまったのである。終了後に様子を聞いたところ、この日はどういうわけか繁華街の通りには人がいなく、**Fox** とハンターしかいない状態だったのだそうだ。以後、商店街は次第に「シャッター街」へと、その道を進んでいるようである。

この **Fox** ハントに良く似た技能を駆使し、スポーツ性の高い **ARDF** (**Amateur Radio Direction Finding**) という競技が普及し、統一ルールが制定され、国内でも各地で実施されるようになってきた。この競技は、野外に設置した数ヶ所（複数）のポイントに **TX** を隠しておき、タイマーで決められた順番に、1 台ずつ自動的に一定時間電波を発射するというものである。受信機を持ったハンターはその電波を受信し、電波の到来方向を割り出し、**TX** を探し当てる。時間とともに電波を発射する **TX** は順番に変わっていくから、すばやい方位測定 of 技能と判断と体力が求められる。そしてできるだけ短時間に多くの **TX** を見つけたハンターが覇者という、いわゆる「電波探知」の技能とスピードを競い楽しむ競技である。

私は以前からこの競技には強い興味を持っていたので、ぜひ競技に参加してみたいと思い、そのノウハウを得るために講習会に参加し、ついでに **ARDF** 審判員の資格も取得した。だが、この競技の審判資格を維持するには、きめられた競技会に審判員として参加することや、定期的に講習を受けたりすることが義務付けられており、かなり厳しいものであった。

残念ながら、これも仕事との両立が難しくなり、競技会への参加どころか、審判技術の向上を目指す講習会等にも出席できなくなり、結局は一度も競技を経験することなく、審判員資格も放棄せざるを得なくなってしまった。非常に残念な結果となったがどうしようもなかった。

元号が平成に変わってしばらく（数年）たった頃、今度は自宅から離れた遠隔地への赴任が連続するようになり、そのために単身赴任を余儀なくされることになった。このため平成 5 年 4 月の

転勤で自宅を離れてからは、アマチュア無線活動は QRT（交信終了の意味、電波停止ともいう）状態になり、電波を発射する機会は（NYPを除いて）ほとんどなくなってしまった。

### ○ “浦島太郎” 効果か？ （それとも無線界の異変か？）

平成 14 年 4 月、自宅から通勤できるところへの勤務となった。連続 9 年間という長い単身赴任から解放されたのだ。長い間 QRT 状態だった無線室（シャック）から再び On Air ができるようになったのである。久しぶりにゆっくりとリグ（無線装置）に向かって腰をおろし、それぞれの無線機に火を入れることが出来るという、気分的なうれしさや懐かしさがあった。同時に無線機器が正常に働くか、スイッチを入れたら煙が出たりしないか、などと余計なことを考えながらほこりを払ったり点検をしたりしたものだ。

だが、長い QRT の間に、自分を取り巻くアマチュア無線界の様子が、さらに大きく変わったように感じられた。特に VHF 帯の様子はそれが大きく、戸惑いを感じたほどだった。何か自分の知らない間に「世の中が変わってしまった」ような“取り残され感”を感じたのである。

具体的に言えば、バンド内が非常に静かになったように感じられたのだ。この“静か”という意味は、無線機の電源を入れた状態で、メインチャンネル（呼び出し周波数）を受信状態にしておくのだが、いつまでたっても電波が「入感しない」のである。受信機の感度が下がっているわけでもなく、ましてやスケルチやボリュームを絞っているわけでもないのに……。つまり以前は良く聞こえていたローカル局の電波が入感しなくなったように感じられたのである。いや、ローカルだけではない。あれほど良く聞こえていた JA1 の局や JA0 の長野市や大町・松本方面の局も聞こえなくなったようなのだ。（整備不良で受信機の感度が低下したとしても悪すぎるように感じた）

また、144 MHz 帯の低いところ（以前に JA1 エリアとの交信によく使っていた周波数帯）に、弱いながら電子機器から出ていると思える漏れ電波が、いくつも入感するようになっていた。以前は家の周りは水田だったのでそういうことはなかったのだが、今では埋立てが進み住宅地と変わった。新築されたそれらの家に備えられた電子機器から漏れているのであろうか。その微弱電波と思われるビート音が増えたのである。無線機につないだアンテナを回してワッチしてみると、いくつかの家の方向でそれが強く入感することから分かった。家を取り巻く無線施設や屋内機器などの環境がすっかり変わってしまったのであろうか。

家を離れていた間、ほとんどメンテナンスをしていなかったタワー上の U・VHF 帯用のスタックアンテナはすっかり傷んでいた。電氣的には正常に動作してはいるものの、外観を双眼鏡などで観察してみると、ポールとブームをつなぐクロスマウントの部分などは錆が発生し、強風に吹かれたりすると、はずれて落ちるのではないかと思われるほど傷んでいた。

アンテナは電波の出入り口である。いくら耳が良かった無線局といわれてもこの状態では話にならない。ともかく急いでアンテナの整備をした。そして、144 MHz 帯のビームアンテナは 9EL×2 に、430 MHz 帯のビームは 11EL×2 のスタックアンテナに新調した。さらにローテーター（アンテナ方向回転器）もオーバーホールし、何年もの間やっていなかったメンテナンスを丁寧に行った。

しかし、新しくなったアンテナにもかかわらず、相変わらず静かな空が続き、144 MHz 帯のビート音はさらに増えたような気がした。

平成年代入ってから携帯電話や、インターネットメールなどが急速に普及した。それによってそれまでのハンディタイプの無線機などによる「無線電話ごっこ」的だったコミュニケーションの

形態が変化し、その結果として無線離れが起きたのではないかと考えられた。

いや、電波は出しているのかもしれないが、メインチャンネルで呼び出したりしなくなったのかもしれないとも考えられた。ローカル局のグループ化が進み、グループで決めたとこかの特定のチャンネルか周波数で交信するようになり、メインチャンネルでの呼び出しなどはやらなくなったのではないかと、とも思えたのである。特定の周波数で呼び出し符号をいわずに **QSO** をしている局が増えてきていることや、**JARL** のバンドプランから逸脱したところで運用している局があることからもうなずける。確かに以前と違った「環境」になってきているように感じられ、「浦島太郎」のごとく戸惑ったりしたものだった。

平成 16 年 3 月 31 日、定年退職をした。「毎日が日曜日」の生活になったのだ。それにより「毎日無線ができる」という気持ちの上に、「いつでも無線ができる」という気持ちが重なって心が躍ったものだった。だが、どういうわけか思ったほど無線への活動意欲は高まらなかった。受信機に **DX** の局が聞こえれば、以前なら飛びつくように呼んだものだが、退職後はそのような気持ちになれず、「いつでもできるさ」という気持ちが育ったのか、無線機の前に座る回数もそれほど増えなかった。アマチュア無線の「燃え尽き症候群」に罹ったのかもしれないと思ったりした。

国内の通信方法が以前と変わってきているようにも感じた。特に **7 MHz** 帯 (**CW**) での交信は極端に短くなり、**RST** のナンバー交換のみで終わることが多く、形式的に **QSO** しているだけ、といった感じを受けた。以前は **RST** のほかに **QRA**(名前)や **QTH**(場所)の紹介、簡単な日常の話題など、もっと **QSO** に中身があったように思えたのだが……。

情報伝達のデジタル化が進み、衛星中継や光ファイバーなどが普及し、世界的に通信網が発達してきた今、無線の信号などは相手に届いて当たり前になってきた感がある。もっともパソコンを使えば **CW** の符合を翻訳させて、信号を「耳で聞く」のではなく、モニター画面で「見る」ことが出来るというから、**IT** 技術も進んだものである。確かに筆記できないほどの超スピードの **CW** を受信したことが何度もある。こうなると **HF** 帯の **CW** などは、アマチュアのコンテスト用の技能程度の必要度になってきたのだろうか、とってしまうのである。

私は自分のこれからのアマチュア無線を、「老化抑制とボケ防止」を目的として楽しむことにしようと、割り切ることにした。そして、今までのように背伸びしてまでやることはない、年相応にのんびりと、ゆとりのある生活の一助とする気持ちで無線を楽しむことにした。

だが、私の退職を待ちかねていたように、地域や町内会、退職者 **OB** の会などから役職の要請が増え、これがまた無線活動の足を引っ張るようになったのだ。

## ○**8J1RL** (昭和基地) との **QSO** (最後まで残っていた南極大陸の局との交信)

2005 年 (平成 17 年) 12 月 26 日、これまでどうしてもコンタクトできなかった 7 番目の大陸、南極との **QSO** に成功した。

夜の 22 時過ぎだったと思うが、何気なく **14 MHz** 帯をダイヤルしていると、**CW** でパイルアップぎみに信号が沸いているところを見つけた。信号はあまり強くなかったが、呼んでいる局は日本やヨーロッパの局が多いように思えた。いったいどこの局が呼ばれているのか、慎重にワッチしていると、“**8J1RL**” とアナウンスしていることがわかった。

12 月の南極の季節は日本と反対の夏であり、昭和基地などでは夏隊 (主に基地の補修や補給、メンテナンスを行うために派遣された技術屋のグループ) が活動しているのである。**8J1RL** はその南極大陸の昭和基地のアマチュア無線局だった。一瞬自分の耳を疑ったが再度アナウンスがある

までワッチし、間違いないことを確認した。急いで key をつなぎ、アンテナの方向を合わせて呼んでみた。

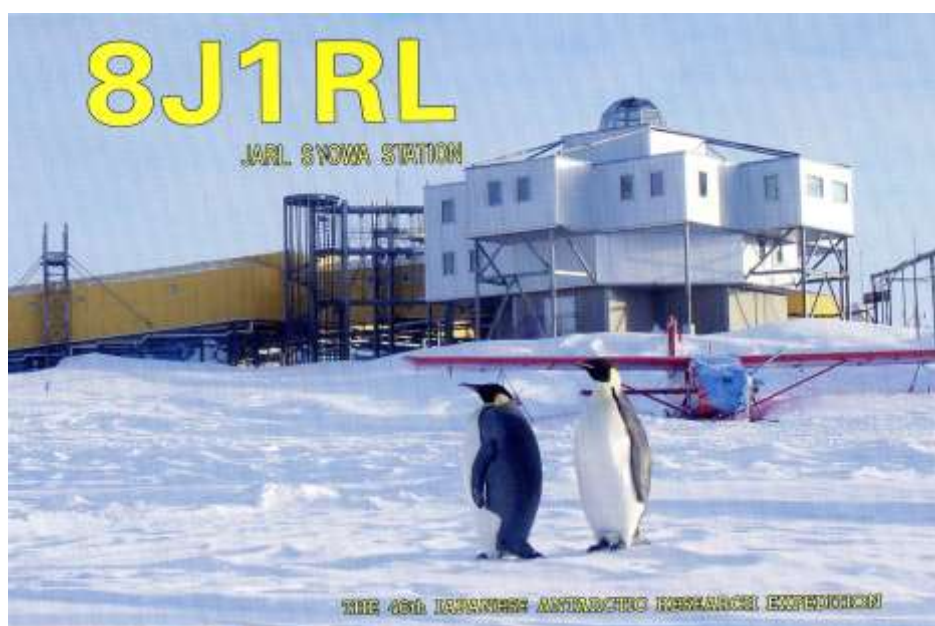
「8J1RL de JAØGUX」と3~4回ほど呼んだところ、向こうの方から「JAØGUX UR 559 BK」（JAØGUX あなたのシグナルは559で入感しています どうぞ）とコールがあった。私はそれに対し「BK QSL UR 559 TU BK」（了解しました あなたも559です ありがとう）と打電して交信は終わった。この間は1分もかからないくらい短い時間だった。だが、しっかりと交信は成立したのである。

数日後、JARLのホームページを検索し、南極の昭和基地（8J1RL）と交信した無線局リストに、“JAØGUX”が載っていることを確認した。

そしてしばらく（数ヶ月）したら、写真のようなQSLカードが届いた。これによりJAØGUXは、全地球上の7大陸のアマチュア局とQSO（交信）し、Cfm（コンファーム＝証明）を達成し、いわゆる7大陸WACを完成したことになるのである。（ばんざ〜い）

7大陸WACの完成は、私がアマチュア無線局を開設して以来の大きな目的の一つだった。それが達成できたのである。この日の夜は（一人で静かに）乾杯をした。

（つづく）



## ○あとがき

こうして40年間にわたって展開してきた自分の無線活動を振り返ってみると、日々の自分の生活が、いかに「無線漬け」になっていたかが分かるような気がする。趣味とはいえ、この無線にかけた時間やエネルギーは膨大なものであったことを改めて感じるのである。

常に無線というもの（土台）の上に軸足を置き、その上に（日々の）生活を乗せた格好で仕事をしてきたように思えるのである。趣味と生業がひっくり返った、本末転倒の生活でなかったかと自問自答するのである。

このアマチュア無線を通して多くの人たちとの出会いがあった。それは無線関係者ばかりではない。無線とはまったく縁のない人たちとの交流も含まれる。交信相手の顔を見ながら話をするというEye ball QSOならまだしも、On Airでは顔も分からない相手と、さらにCWにおいては性別すら分からない相手に、あの単純な機械音をなかだちとして意を通じることができたのである。

まだ行ったこともない世界の、地の果てから送られてきた、QSLカードの裏に書かれたメッセー

ジを読み、オペレータ（局長）の温かい人間性を感じて思わず微笑んだりしたものだ。

最近開催された ARRL の DX CONTEST に参加したとき、W（アメリカ）や SM（スウェーデン）などの Over Sea 局の中に、30 数年ぶりと思える聞き覚えのあるコールサインの局に出会った。コンテスト中だったので詳しいあいさつは出来なかったが、過去には QSL カードも送ってくれた局長である。おそらく今回も送ってくれるであろうか。それにはなんと書かれてくるか楽しみでもある。

ローカル局の中には個人的にいろいろと世話になった局長さんたちがいる。無線局は閉局したものの、別の新しい趣味への挑戦などと、活躍の場を広げている OM も多い。私がいろいろな困難に対応できず、無線活動の熱が冷めかかったときなども、陰ながらにバックアップをしてくれた OM 諸氏の存在は、私にとっては大きな励みであったと思っている。関わってくれた各局には大きな感謝を表したい。

長い QRT（ブランク状態）から脱して「浦島太郎」になった私は、「糸魚川の空は静かになった」などと、OT（old timer＝年寄り）ぶったことを言ったりした。本当にそうなのだろうか？

いや、事実はそうではないと思う。丹念にワッチをしてみれば、今までどおりローカル局は空に出ているし、市外局も時々入感したりしているのである。

原因を探ればそれらに対応できなくなった自分なのであろうと思う。決して「空」が静かになったのではない。「自分」が静かになったと言うべきであろう。（巷で言われている“燃え尽き症候群”とでもいう症状なのだろうか？）

まだ駆け出しの頃、「あの局は Rig や Antenna が整ったら急に静かになった」などと、OM 局の陰口を言っていたこともあったが、今自分がその陰口を言われるようになってきていることに、苦笑したりしている。

NYP を 3 巡クリヤ（36 年間連続）が完成できたことや、7 大陸 WAC が完成したことなど、ラジオ少年だった頃の夢から始まる挑戦が、次々に実現できた今、これ以上の贅沢をいう気はない。ただ、もう少しアマチュア無線は続けたい。のんびりと趣味の無線を楽しみたいと思っている。

私にとっては、やはり何と言ってもアマチュア無線は “King of Hobbies” なのである。

## も く じ

- 初めてのラジオづくり（小学校時代のほろ苦い思い出）……………P1
- 遠距離受信にはまる（中・高校時代＝ラジオ少年と呼ばれた？）……………P3
- ハムへの道はきびしかった（小千谷時代）……………P5
- 受信機の製作と SWL 活動（全知全能を注いで作り上げた高性能受信機）……………P6
- 国試受験（文字通り一発勝負だった）……………P8
- そして開局（したのだが……）……………P9
- 姫川クラブ（のちの糸魚川クラブ）に入会……………P10
- 6m（50MHz）モービル運用（そんなに格好良くはなかった？）……………P11
- HF へ進出……………P12
- 最初の Over Sea QSO は DL（西ドイツ）だった……………P13



○ 6m (50 MHz) から 2m (144 MHz) へ .....	P13
○ DX を期待して上げた 7 エレスタック (上げたところは田んぼの真ん中だった) .....	P15
○ 移動運用 (高台を求めて.....) .....	P16
○ 自作機器 (根知谷時代) .....	P17
○ 竹ヶ花で開局 (だが、期間は短かった) .....	P19
○ 平牛へ QSY (引越し) .....	P19
○ 念願の自立タワーの建設 (その建設のエネルギーはどこから?) .....	P20
○ 11 エレ 4 パラの威力はすごかった (組立作業もそれ以上に大変だった) .....	P21
○ タワーやアンテナのメンテナンス余話 .....	P24
○ “何でも” 自作した (自称: 自作バカ 別名: アマチュア無線 <u>工作士</u> ?) .....	P25
○ 2 級アマ取得への挑戦 .....	P29
○ 3el Tri Bander と Over Sea's QSO + 今だから言える 100w 開局の「裏ばなし」 .....	P31
○ コンテストの参加とアワードハント .....	P35
○ QSL カードについて .....	P36
○ “笑い話” にもならないバカバカしい話 2 題 .....	P38
○ JARL の役員時代 (ともかく忙しかった) .....	P40
○ 冬眠期 (?) に入る (仕事に追われ思うように無線ができなくなった時期) .....	P41
○ “浦島太郎” 効果か? (それとも無線界の異変か?) .....	P44
○ 8J1RL (昭和基地) との QSO (最後まで残っていた南極大陸の局との交信) .....	P45
○ あとがき .....	P47